【翻　訳】

イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注（2）

亀谷　　学・大塚　　修・松本　隆志　訳注

本稿は西暦9世紀（ヒジュラ暦3世紀）の後半に著作活動を行ったイブン・ワーディフ・ヤアクービーの著書『歴史*al-Ta'rīkh*』の日本語訳注である[1]。連載の第二回となる今回は、第一部・古代史部分のうち、アブラハムからモーセに至る記述の訳注と当該部分についての解説となる。なお、解説については亀谷が、日本語訳注部分については松本が、それぞれ元となる原稿の作成を担当したが、それらはすべてメンバー三人による検討、議論を経た成果である。

また、翻訳プロジェクトに関わる成果として、大塚修「人類の起源を求めて：前近代ムスリム知識人による諸民族の系譜の創造」『西洋史研究』新輯48号（2019）、pp. 166–183が刊行された。あわせてご参照いただければ幸いである。

〈今回の翻訳部分の解説〉

本号に掲載する翻訳は、第一回に引き続き、いわゆる『旧約聖書』に遡る情報を軸とする記述であり、今回はアブラハムからモーセに至る部分となる。

前稿の「『歴史』訳注（1）」ではアダムの失楽園からノアの洪水後の顛末に至るまで、『宝の洞窟』というシリア語文献を参照したとおぼしき記述が中心となっていた。そのストーリーの軸をなしていたのは、アダムの身体をその死後も洞窟に保持し、彼らがその時いた山から降りる際にそれを大地の中央に安置するように、代々遺言してそれを守るということであった。ヤアクービー『歴史』の記述によると、それはノアの洪水の後、セムの子レメクの子メルキツェデクをその守り人として、しかるべき地にアダムの体を安置したことによって終わっている[2]。

初期のムスリムによるユダヤ教についての記述を分析したアダンは、ヤアクービーが『旧約聖書』「創世記」部分の記述のために『宝の洞窟』を利用した理由として、アダムが残した自らの身体に関する遺言waṣīyaを代々その後継者に受け継いでゆくという叙述の形が、イマームの指名naṣṣに

1　著者とその著作、写本と刊本、翻訳の状況などについては、亀谷学・大塚修・松本隆志「イブン・ワーディフ・ヤアクービー『歴史』訳注（1）」『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）8（2020）, pp. 123–154にて述べたので、適宜参考とされたい（PDF版は弘前大学学術情報リポジトリ内のhttp://hdl.handle.net/10129/00007041からダウンロードすることができる）。
なお、以後同訳注は「『歴史』訳注（1）」と略記する。

2　L: I, 14–15;「『歴史』訳注（1）」pp. 148–149.

よって後継者を決定してゆくというシーア派の思想に親和的であるためと指摘している[3]。確かに、セムに関する記述において、アダムの身体についての物語が一段落ついた後、具体的な遺言の記述はエベルの部分でなくなってしまうものの、さらにその子孫に至るまで、当代の指導者が代々後継者を指名してゆくという記述の形式自体は残されている。

その後継に関する記述も、アブラハムに至って変化することになる。アブラハムの祖父であるナホルの時代については、まず偶像崇拝が盛んになったことが語られるが、その記述の多くはアードの民に遣わされたフードと、サムードの民に遣わされたサーリフの逸話に費やされ、ナホルの事績はほとんど記されない。またその子テラハの記述においては、偶像崇拝者であるニムロドの所業が記され、そこで彼の国に生まれる赤子の中から彼の宗教を破壊する者が出現するという天文学者（占星術士）munajjimの言葉を信じたことによって、アブラハムは生まれた直後から洞窟に隠されるということになり、後継指名や遺言などについての言及は見られない[4]。

今回の訳注の冒頭にあるアブラハムについての記述では、『クルアーン』からの引用と思しき部分が散見され、イスラームの存在を前提とした記述が大部分を占めることになる。『旧約聖書』の語りをベースとしている箇所においても、それを換骨奪胎することによって、イスラーム側が持つ情報に則した記述に組み直している部分が見られる。

ヤアクービー『歴史』におけるアブラハムの記述は、①若年期における一神教信仰への目覚め、②一神教信仰の宣教とニムロドの対応[5]、③ロトとソドムとゴモラの町の記述、④ハガルによるイシュマエルの出産、⑤サラの嫉妬とハガルらの追放、⑥メッカにおける巡礼の由来の逸話、⑦ソドムとゴモラの滅亡とサラによるイサクの出産、⑧アブラハムとイシュマエルの妻の逸話、⑨カアバ創建と巡礼由来譚[6]、⑩アブラハムが息子を犠牲に捧げようとする逸話、⑪アブラハムのイシュマエルに対する遺言と彼の子孫と彼の死、という順序で進んでゆく。

上記のように区分した部分のうち、⑧、⑨、⑪の三つを除いて、すべての部分で『クルアーン』からの引用と思われる文言が組み込まれている。ここで興味深い点は、『旧約聖書』に対応する記述がなく、さらに「ジュルフム族の出身」というアラビア半島由来のディティールが組み込まれた⑧や、カアバ神殿からイスラーム期以降に確立された巡礼にて訪れる場所について詳しく記した⑨には、『クルアーン』からの引用が見られないことである。こうした点は、アラビア半島固有の背

---

3 C. Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible: From Ibn Rabban to Ibn Hazm*, Leiden: E.J. Brill, 1996, p. 117.

4 L: I, 19–21;「『歴史』訳注（1）」pp. 152–154.

5 アブラハムの若年時代のニムロドとの逸話については、B. M. Hauglid, “On the Early Life of Abraham: Biblical and Qur’ānic Intertextuality and the Anticipation of Muḥammad,” in *Bible and Qur’ān: Essays in Scriptural Intertextuality*, ed. J. C. Reeves, Atlanta: Society of Biblical Literature, 2003, pp. 87–105.

6 イスラームの伝承におけるアブラハムやイシュマエルのアラビア半島西部における活動についての逸話については、R. Firestone, *Journeys in Holy Lands: The Evolution of the Abraham-Ishmael Legends in Islamic Exegesis,* Albany, N.Y.: State University of New York Press, 1990が詳細に検討している。

景を持つ伝承群について、必ずしもそれが『クルアーン』と直接結びつく形で語られていなかったことを示唆しているように思われる[7]。むしろ『クルアーン』が用いられている箇所は、旧約的な伝承を語る際に、それがイスラーム的伝承であるという色づけのために散りばめられているという印象を受ける。

アブラハムの記述の後には、イサク、ヤコブ、ヨセフに関する記述が続くことになり、最終的にムハンマドに至るイシュマエル（イスマーイール）の系譜、すなわちアラブの系譜は、ヤアクービーの『歴史』の第一部の末尾に置かれることになる[8]。イサク、ヤコブ、ヨセフに関する記述については、ヨセフに関する物語が『クルアーン』に記載されていることが示されている他は、概ね『旧約聖書』の範囲から逸脱することなく語られてゆく。しかし、ヨセフについては、その遺言にてモーセに関する予言を発しており、これは『旧約聖書』にも、『クルアーン』にもない逸話となっている[9]。

続くモーセに関する記述は、分量的には本訳注の6割以上を占め、多くの紙数が割かれている。記述の内容を整理すると、①モーセの誕生時にファラオによる迫害を逃れたこと、②モーセがヨセフの予言を成就する者であることの確認、③モーセの狼藉とミディアンのもとでの滞在・結婚、④神の声を聞くモーセとイスラエルの民のもとへの帰還、⑤ファラオとその魔術師との対決、⑥出エジプトの開始とヨセフの遺体の発見、⑦出エジプトと紅海横断の逸話、⑧神による荒野での滞在の命令、⑨会見の幕屋の建設、⑩十戒、⑪金の子牛の崇拝[10]、⑫イスラエルの人口調査、⑬神への捧げもの、⑭神による食べ物の賜与、⑮ミディアンとの戦い、⑯祭司アロンの死とヨシュアの後継、⑰

---

7 ファイアストーンによると、アラビア半島やその周辺に存在した旧約情報の中には、『クルアーン』に取り入れられたものもあれば、取り入れられなかったものもあったと考えられるという（R. Firestone, “Hagar and Ishmael in Literature and Tradition as a Foreshadow of their Islamic Personas”, in *Abraham's Family: A Network of Meaning in Judaism, Christianity, and Islam*, ed. L. Bormann, Tübingen: Mohr Siebeck, 2018, pp. 397–420）。例えば、イシュマエルの母ハガルは『クルアーン』にはその名が言及されないが、ハガルに関わる伝承は、イスラームにおけるメッカ巡礼の儀礼と関連して、クルアーン注釈やハディース、歴史叙述などにおいて、大量に現れることになる。これについてファイアストーンは、『クルアーン』の中に含まれる情報が集められた時点では、アラビア半島内外にアラビア語で存在した旧約情報の一部のみがアクセス可能であり、その後様々な情報が集積されて、そこに付け加えられる「伝承」として残されることになったとしている。

8 ヤアクービー自身は、イシュマエルから派生したアラブの系譜や歴史の記述を後回しにした理由として、それが預言者ムハンマドやカリフたちの歴史と直接つながっていることを挙げている（L: I, 252）。

9 あるいは、キリスト教の文脈における予型論的な意味合いがある逸話であるかもしれない。近年の『クルアーン』研究では、『クルアーン』に現れる様々な逸話を古代末期のユダヤ教やキリスト教の文献の文脈に位置付けてその来源を明らかにしようとする研究が盛んに行われている（例えばG. S. Reynolds, *The Qur'ān and its Biblical Subtext*, London & New York: Routledge, 2010; E. I. El-Badawi, *The Qur'ān and the Aramaic Gospel Traditions*, London & New York: Routledge, 2014などが代表的な研究と言えよう）。しかし『クルアーン』に現れない伝承については、まだ十分な検証は行われているとは言えず、また、現時点の訳者の能力ではこれらを十分にカバーすることはできなかった。今後の課題としたい。

10 イスラーム期以降の文献には言及していないが、金の子牛に関わる一連の逸話に関しては、大澤耕史『金の子牛像事件の解釈史：古代末期のユダヤ教とシリア・キリスト教の聖書解釈』（教文館、2018年）に詳しい。

「申命記」に基づくモーセによる神の指令の伝達、⑱モーセの遺言と死、に分けることができる。

出エジプトを敢行するまでの記述に関しては、『クルアーン』の記述や、明らかにアラビア半島由来の伝承に基づく語りがそれと分かる形で用いられている。

例えば①モーセの誕生時にファラオによる迫害を逃れた記述では、『クルアーン』から直接の引用と思しき箇所は一箇所だけであるが、『旧約聖書』では赤子のモーセが入った箱を拾い上げるのはファラオの娘であるのに対して、ヤアクービーのテクストでは、ファラオの妻としており、これは『クルアーン』におけるこの逸話に関する記述がファラオの妻としていることと一致する[11]。また、③モーセの狼藉とミディアンのもとでの滞在・結婚の記述の中では、モーセの舅となる人物が、『旧約聖書』ではエトロとされているのに対して、ヤアクービーのテクストでは『クルアーン』に登場する預言者シュアイブとされている[12]。また、『クルアーン』に基づくのではないが、明らかにアラブ的な要素が持ち込まれている例として、モーセが対峙するファラオの名前がワリード・ブン・ムスアブという、アラブの名が用いられていることも挙げられる[13]。

⑧神による荒野での滞在の命令にいたるまでの記述には、時折『クルアーン』からの引用が用いられているが、⑨会見の幕屋の建設の記述以降では、『クルアーン』からの引用が見られなくなる。会見の幕屋の詳細が描かれたり、十戒の内容についての完全ではないもののほとんどの条が採録されていることは、ヤアクービーが『旧約聖書』か、そうでなくともその情報を一定程度詳細に伝えるテクストにアクセスできたことを示しているように思われる[14]。

⑧以降の記述は、総じて『旧約聖書』の記述の流れを追うようにして進んでゆく。しかしその中には、微細なものを含めて、イスラーム教徒としてのヤアクービー（あるいは彼に情報を与えた者）の改変が見られる。例えば、十戒の中には、神の名をみだりに唱えることを禁じる文言があるが、ヤアクービーのテクストでは、それが神の名にかけて嘘の誓いをすることの禁止に書き換えらえれている[15]。これはユダヤ教にいては神の名を唱えることへの忌避があることに対して、イスラームの教義にはそうした禁が存在しないことを反映したものであると考えられるだろう。また、『旧約聖書』「申命記」（あるいはそれに類するテクスト）からの翻訳であると考えられる部分でも、祭司に対して寄付を行うことについての記述で、『旧約聖書』原文に対応する語のないザカート zakāt（イスラームにおける「喜捨」）という単語を用いたり、さらにそれが使用される対象となる人々について、これまた『旧約聖書』にはないが、『クルアーン』には登場する「旅人たち banī al-sabīl」という語を付け加えている[16]。これらの改変は、ユダヤ教の規範の中に、イスラームにおいて規定さ

---

[11] L: I, 31. 本訳注のp. 133, 注150参照。

[12] L: I, 32. 本訳注のp. 134, 注157参照。

[13] L: I, 31. 本訳注のp. 133, 注147参照。

[14] アダンはこれらの箇所でのヤアクービーの引用は正確であると評価している（Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible*, pp. 118–119）。

[15] L: I, 36. 本訳注のp. 140, 注207参照。

[16] L: I, 46. 本訳注のp. 153, 注342, 344参照。

れた諸事項が反映されたものであると言えるだろう。

ただし、こうした改変は徹底したものではない。「木綿と羊毛を混ぜて織った服を着てはならない。また、あなたたちの服の縁を房で飾りなさい」[17]など、ユダヤ教の慣習がそのまま残されている部分もある。

また、今回翻訳された部分の全体を見ても、どのような基準で『旧約聖書』からその部分を抜粋・翻訳しているのかについて、確たる方針は窺えない。ヤアクービー自身が、このテクストを要約と位置付けていること[18]も考慮しなければならないだろうが、今後古代末期から同時代にかけての様々な文献との比較を通じてさらに分析を深める必要があるだろう。

なお、本稿においては、「『歴史』訳注（1）」と比べても、本文のテクストだけでは十分に意味を確定することができず、『旧約聖書』、『クルアーン』また、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』やマスウーディー『黄金の牧場』などの記述を参照して意味を確定した部分が少なくない。また、おそらく翻訳が介在するためだと思われるが、通常のアラビア語文法では解釈しにくい場所も見られた。そのため、参照した箇所、特にモーセの後半部分については、『旧約聖書』のどの箇所を参照したかについて、逐一注釈で明示したことについて了承されたい。

〈凡例の追加と修正〉

訳注に関わる凡例については「『歴史』訳注（1）」pp. 133–134を参照されたい。以下、追加・修正の必要な事項を列挙する。

（1）追加

・アラビア文字のラテン文字転写について、名詞の格変化によって変化する語尾の母音表記は原則として省略するが、解釈上必要な場合は上付き文字で表示する。

・「『歴史』訳注（1）」においてすでに登場しているものについては、本稿での初出時においても原綴の表示は省略する。

（2）修正（なお変更部分には下線を付した）

・［　］は、<u>写本テクスト上の脱落を、底本としている刊本が補っている場合に用いる</u>。

・『クルアーン』からの引用箇所については、《 》で囲んだ上で、<u>脚注にて章番号、節番号を示した</u>。なお、日本語訳は中田考監修、中田香織・下村佳州紀訳『日亜対訳クルアーン：［付］訳解と正統十読誦注解』（作品社、2014年）に基づくが、文脈に合わせて若干の修正を加えた部分もある。

・『旧約聖書』に記述のある人名については原則として、<u>旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書［机上</u>

[17] L: I, 45. 本訳注のp. 152, 注324, 325参照。

[18] L: II, 2.

版］』全４巻（岩波書店、2004–2005年）に従う。これに記述のないものについては、アラビア語原音の転写を原則とするが、その際には、特に母音の決定のために、サアディヤ・ガオンによるモーセ五書の翻訳であるSa‘adiyā Ghā’ūn b. Yūsuf al-Fayyūmī, *al-Tawrāt: al-Tafsīr al-Aṣlī min Ma‘ālī al-Ḥākhām Sa‘adiyā Ghā’ūn b. Yūsuf al-Fayyūmī,* Jerusalem:［project Saadia Gaon］, 2015（Arabic Transcription of Judeo-Arabic original by Rabbi Yomtov Chaim ben Yaakov Danknish Hacohen）に付されている母音表記を参考とした。また、注釈などで参考とする際も、原則として上記の旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書［机上版］』を参照した。

（3）略号

本稿で文献表示の際に用いられる略号は以下のとおりである。なお、事典類については、文献表示の際はその項目名で表示し、ページ数は省略する（略号については各号で使用されるものについてその都度掲載する）。

L: al-Ya‘qūbī, *al-Ta’rīkh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883（repr. 1969）.（ライデン版刊本）
M: Manchester, John Rylands Library, Arabic 801.（マンチェスター写本）
C: Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10.（ケンブリッジ写本）

E: M. S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍiḥ Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.
EI²: The Encyclopaedia of Islam, New Edition, 11 vols., ed. C.E. Bosworth et al., Leiden: E.J. Brill, 1960（1954–2008）.
EQ: Encyclopaedia of the Qur’ān, 6 vols., ed. J. D. McAuliffe et al., Leiden: E.J. Brill, 2001–2006.

『新イスラム事典』：嶋田襄平ら編『新イスラム事典』（平凡社、2002年）
『岩波イスラーム辞典』：大塚和夫ら編『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）
『旧約新約聖書大事典』：旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』（教文館、1989年）
『預言者ムハンマド伝』：イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註、後藤明ら訳『預言者ムハンマド伝』全四巻（岩波書店、2010–2012年）

本稿はJSPS科学研究費「ファーティマ朝カリフ概念の研究によるカリフ史の再構築」（基盤研究（C）18K00984）、「イスラーム時代西アジアにおけるイラン概念の復活と変容」（若手研究20K13193）の研究成果の一部である。

〈訳注〉

アブラハム

アブラハムは巨人ニムロドの時代に育った。それまでいた洞窟から出て空を見上げて、金星を見て輝ける星であることを知ると、**《彼は言った。「これがわが主である。》**[19]まことにいと高く崇高な御方」と。その後星は隠れてしまった。すると彼は言った。「わが主は隠れない」と。その後月が昇ると、彼は月を知った。**《彼は言った。「これがわが主である」》**[20]と。しかし、程なく月は隠れてしまった。すると**《彼は言った。「わが主が私を導かなければ、私は迷った民（の一人）となったであろう」》**[21]と。やがて夜が明けて太陽が昇ると、**《彼は言った。「これがわが主である。》**[22]最も明るく輝かしい御方」と。やがて太陽が隠れると、彼は言った。「隠れてしまった。わが主は隠れない」と。かくの如く、神はアブラハムについてその情報と出来事を語った[23]。彼の歯が生えそろい、彼の民が偶像を崇拝するのを見ると、彼は驚いて言うようになった。**《「お前たちは自分で刻んだものに仕えるのか」》**[24]と。すると彼らは言った。「お前の父はお前にこうすることを教えたはずだ[25]」と。[22] 彼は言った。「私の父も迷った者たちの一人だ」と。この彼の発言が民の中で広まり、人々は彼のことについて話すようになった。

神はアブラハムを預言者として遣わした。そして神は彼のもとにジブリールを送り、彼に神の宗教を教えた。そうしてアブラハムは彼の民に**《「私はお前たちが（神と）同位に崇めるものとは無縁である」》**[26]と言うようになった。アブラハムのことを耳にしたニムロドは、彼に使者を送り、彼に対して（そのことを）禁じた[27]。するとアブラハムは民の偶像を壊し、「お前自身から（偶像を）遠ざけよ idfaʻī ʻan nafs-ka」と告げることをはじめた。そこでニムロドは火を燃え上がらせ、投石機にアブラハムを取り付け、火の中へ彼を投じた。すると神は火に**《「冷たくなり、アブラハムに対して**

---

[19] 『クルアーン』6章76節。

[20] 『クルアーン』6章77節。

[21] 『クルアーン』6章77節。

[22] 『クルアーン』6章78節。

[23] この部分は『クルアーン』において語られている記述に基づいていることを、ヤアクービーが明言しているものと考えられる。

[24] 『クルアーン』37章95節。

[25] 刊本では「我々に教えた ʻallama-nā」となっているが、両写本には「お前に教えた ʻallama-ka」とある（M: 4b; C: 7a）。ここでは両写本に従った。偶像崇拝をめぐるアブラハムと父テラハのやりとりはヤアクービーのテキストでは詳述されていないが、『クルアーン』では6章74節ではアブラハムが父アーザル（テラハ）の偶像崇拝を非難する発言が、同19章42–48節では偶像崇拝をめぐってアブラハムと彼の父が口論になる様子が、それぞれ語られている。また『旧約聖書』「ヨシュア記」24章2節ではテラハは「他の神々に仕えていた」とされている。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』には父テラハが偶像作成者であったという伝承がある（Abū Jaʻfar Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E.J. Brill, 1879–1901, serie 1, p. 256）。

[26] 『クルアーン』6章78節。

[27] 刊本では fī-hā となっているが、両写本には fa-nahā-hu とある（M: 5a; C: 7a）。ここでは両写本に従った。

安全となれ」》[28]と意を下した。それゆえアブラハムは焼かれることなく火の中心に座したので、ニムロドは「神ilāhを奉じる者は、アブラハムの神ilāh Ibrāhīmと同等のものを奉じよ」と言った。

ロトLūṭはアブラハムと信仰を同じくしていた。ロトはテラハの子にしてアブラハムの兄弟であるハランKhārānの子であった。神はアブラハムに対し、ニムロドの治める国を出て、聖なる地であるシリアへ向かうよう命じた。そこでアブラハムと、テラハの子ハラン[29]の娘にしてアブラハムの妻であるサラSārah、そしてハランの息子ロトは神の命じたところへ移住していった。彼らはパレスチナFilasṭīnの地に居を定めた。アブラハムの財産もロトの財産も増えていった。アブラハムはロトに言った。「神は我らの財産と家畜を我らのために増やしてくださった。そこで、お前は我らから[30]分かれ、ソドムSudūmの町とゴモラ'Umūra[31]の町[32]に住みなさい」と。そこはアブラハムのいる所からほど近い場所であった。ロトがソドムとゴモラ[33]の町にやって来て居を定めたところ、その地方の王が彼のもとにやって来て、彼と戦い、彼の財産を奪い取ってしまった。そこでアブラハムが行ってロトの財産を取り戻した。そして神がアブラハムの財産を増やしたので、アブラハムは「主よ、私は財産をどうすれば良いのでしょうか。私には子がいないのです」と言った。神は彼に「まことに私がお前の子孫を星々の数ほどに増やす」と啓示を下した。サラのもとにはハガルHājarという女奴隷jāriyaがいた。サラはハガルをアブラハムに贈った。アブラハムはハガルと交わった。そしてハガルは身籠り、イシュマエルIsmā'īlを産んだ。この時、アブラハムは86歳だった。神は「私はお前の子孫を増やし、[23]永遠に残る王権を彼らに委ねる。その結果、誰もその数を知ることはなくなる（ほど多くなる）だろう」と言った。ハガルが出産すると、サラは嫉妬にかられて（アブラハムに）「彼女とその子を私から遠ざけてください」と言った。彼はハガルとイシュマエルを連れ出し、メッカに至った。彼は神殿のそばに彼女らを住まわせたのち、彼女らと別れたのだが、その際ハガルは彼に「私たちを誰に委ねたのですか」と言った。彼は「この神殿の主に」と言った。さらに彼は「神よ、**《私はあなたの神殿の傍らの作物をもたらさない谷間（涸川）の地（メッカ）にわが子を住まわせました》**[34]」と言った。やがてハガルの持っていた水が尽き、イシュマエル

---

[28] 『クルアーン』21章69節。

[29] ケンブリッジ写本ではKhārān b. Tāḥūr 'amm-huとなっており（C: 7a）、これが刊本ではKhārān b. Nāḥūr 'amm-huと翻刻されているが、マンチェスター写本では一度Khārān b. Tāḥūr と書いた後にKhārān b. Tārakhと修正されている（M: 5a）。'amm-huと読まれた部分は写本に書き込まれた何らかの記号だと考えられる。ここではマンチェスター写本の修正に従った。

[30] 両写本ではbi-nāとなっているが（M: 5a; C: 7a）、刊本ではmin-nāと直されている。ここでは刊本に従った。

[31] 両写本では'Umūrīyaとなっているが（M: 5a; C: 7b）、刊本では'Umūraと直されている。ここでは刊本に従った。

[32] ソドム、ゴモラともに死海南東部沿岸に位置していたと考えらている（R. Hentschke+保坂高殿「ソドム」『旧約新約聖書大事典』）。

[33] 両写本では'Umūrīyaとなっているが（M: 5a; C: 7b）、刊本では'Umūraと直されている。ここでは刊本に従った。

[34] 『クルアーン』14章37節。ただし、『クルアーン』ではmin dhurrīyatīとなっている部分が、ヤアクービーではibnīとなっている。

はひどく喉が渇いてしまった。そこでハガルは水を探しに出かけてサファーの丘al-Ṣafā[35]に登った。すると彼女はイシュマエルの近くに止まっている鳥を見つけて戻った。イシュマエルが鳥とともにいた時、鳥[36]は足で地面をこすっていた[37]。すると（そこから）水が湧き出した。（その水が地面に）消えてしまわないよう、彼女は水を集めた。これがザムザムの泉bi'r Zamzam[38]である。

ロトの民は罪深き行為をしていた。彼らは**《諸世界の（人々のうちの）男たちに赴》**[39]いたのである。それは次のような次第であった。髭の生えていない少年の姿をした悪魔iblīsが彼らの前にあらわれ、自分と交わるよう仕向けたのである。こうして彼らはその行いを熱望するあまり、女性と交わることから遠ざかり、男性との交わりを求めるようになってしまったのであった。そこでロトは彼ら（のそうした行い）を禁じたが、彼らはやめなかった。彼らは裁定について逸脱していた。やがて彼らの逸脱はことわざになり、人々は「ソドムの（人々の）裁定よりも無法ajwar min ḥukm Sudūm[40]」と言った。たとえば、彼らの内のある男が別の男に忌避される行いをなし、殴ったり鞭で打ったりした後、「俺がしてやったことに対する報酬を、お前は支払え」などと言うのであった。また、彼らにはシャクリーShaqrīとシャクルーニーShaqrūnīという2人の裁定者がいた。この2人は逸脱して不正であるような悪意のある裁定を下していた。

ロトの民の行いが度をこし、逸脱が増すと、神は彼らを滅するために天使たちを遣わし、天使たちはアブラハムのもとにあらわれた。アブラハムは客を迎え入れて歓待することを常としていた。彼らが彼のもとを訪れた時、彼は焼いた仔牛を提供した。しかし、彼らがそれを食べないのを見て、彼は彼らを不審に思った[41]。そこで彼らは自分たちのことを彼に説明して「われらはこの町の民

---

35 メッカの聖モスクに隣接したサアイ廊の南側にある岩丘。現在のそれは、丘というよりも岩肌を露わにした高さ4mほどの大岩である（森伸生「サファーの丘」『岩波イスラーム辞典』）。

36 『預言者ムハンマド伝』では、このザムザムの泉を掘った鳥の役割を天使ジブリールが担っている（『預言者ムハンマド伝』1: 95）。

37 両写本ではfaḥushaとなっているが（M: 5a; C: 7b）、刊本ではfaḥaṣaと直されている。ここでは刊本に従った。

38 メッカの聖モスク内にある泉の名称（森伸生「ザムザム」『岩波イスラーム辞典』）。

39 『クルアーン』26章165節。「男たちに赴いた」とはすなわち男色の意である。なお、『クルアーン』では動詞がta'tūnaとなっているが、ヤアクービーはya'tūnaとしている。

40 若干形は異なるが、既に9世紀の文人ジャーヒズal-Jāḥiẓが引用するアムル・ブン・ダッラーク・アブディーの詩の中に、「ソドムの支配より無法ajwar min ḥukūmat Sudūm」という文言が見える（al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, ed. 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, Cairo: Maṭba'at Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalabī, 1965, vol. 6, p. 157）。一方、12世紀のマイダーニーは諺集成の中で「ソドムの法官qāḍīより無法」という形で立項している（al-Maydānī, *Majma' al-Amthāl*, s.l.: Maṭba'at al-Sunna al-Muḥammadīya, 1955, vol. 1, p. 190）。そこでは、その法官の名がソドムであったという説、都市の名前であるという説、そこを治めていた暴君の名にちなんで都市の名前が付けられたという説が挙げられている。また、ヤークートも『諸国集成』の「ソドム」の項にて、マイダーニーを引用して「ソドムの法官より無法」という諺を紹介している（Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, Beirut: Dār Ṣādir, 2015, vol. 3, pp. 200–201）。

41 『クルアーン』11章69–70節では「また、かつてわれらの使徒たち（天使たち）がアブラハムの許に吉報をもたらした時、彼らは、『平安（の挨拶）を』と言った。彼も『平安を』と言った。そして、ほどなくして彼は石焼の子牛を持って来た。ところが彼らの手がそれに伸びないのを見、彼は彼らを不審に思い、彼らに恐れを抱いた」とされている。

を滅するために、あなたの主が遣わした者である」と言った。この町とはロトの民の暮らす町ソドムのことである。すると彼らに対してアブラハムは言った。**《「そこには［24］ロトがおります」。彼らは言った。「われらはそこに誰がいるかを一層良く知っている。われらは彼と彼の家族を必ずや救うであろう。ただし、彼の妻は別》**[42]である」と。アブラハムの妻であるサラは立っていたが[43]、彼らの発言に驚いた。彼らはイサクIsḥāq（の誕生）の吉報を彼女に知らせた。すると彼女は「**《私が子供を生むとは。私は老女であり、こちらはわが主人で老人です》**[44]、それもかなりの」と言った。この時、アブラハムは100歳であり、彼女は90歳であった。天使たちがロトのもとにやってきた時、彼の妻は彼らを見て、町の人々のために煙を上げた[45]。町の人々はロトのもとを訪れて、「お前の客たちを俺たちに渡せ」と言った。ロトは「私の客のことで**《私を辱めないでくれ》**[46]」と言った。なおも彼らが言い募ると、ジブリールは彼らを退けて盲目にしてしまった。そして天使たちはロトに「われらは彼らを滅する」と言った。彼は「いつですか」と言った。彼らは「朝に」と言った。彼は「町の人々には朝まで猶予があるのですね」と言った。ジブリールは彼に「**《朝は近いではないか》**[47]」と言った。夜明けになると、ジブリールは彼に「出立せよ」と言った。その後ジブリールは町の人々の上に町をひっくり返した[48]。あるいは、彼らの上に火が降り注いだとも言われる。彼らの内一人として助かった者はいなかった。ロトの妻もその中にいて、塩になってしまった。彼らの中で語り伝える者は残らなかったのである。

---

42 『クルアーン』29章32節。『旧約聖書』「創世記」19章15–26節では、ロトの妻も助かるはずであったが、妻本人の行動により塩の柱となってしまったとされている。

43 『クルアーン』11章71節には「彼の妻は立っていたが、笑った」とある。彼女が立っていた理由も笑った理由もこのテクストからは不明だが、『旧約聖書』「創世記」18章9–15節の記述を見ると、サラが立っていたのは客人から見えない天幕の中であること、笑ったのはそれに先立ってサラに子供が生まれることを客人が予言していたからである（また、ヘブライ語でイサクyiṣḥaqが「笑う」という動詞と同じであることから、暗示的に用いられている）。しかし『クルアーン』においてもヤアクービーのテクストにおいても、その発言が後に来ているため、解釈が困難になっている。一方「驚いた」という文言に関しては、タバリーのクルアーン注釈書『クルアーン章句解釈に関する解明集成』では、「笑った」を「驚いた」の意味で読む解釈や「驚いて笑った（ḍaḥikat ta‘ajjub^{an}）」という解釈がなされている（al-Ṭabarī, *Jāmi‘ al-Bayān ‘an Ta’wīl Āy al-Qur’ān,* ed. ‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Muḥsin al-Turkī, Cairo: Markaz al-Buḥūth wa Dirāsāt al-‘Arabīya wa al-Islāmīya bi-Dār Hajar, vol. 12, pp. 472–478）。レイノルズは、これは古代末期のキリスト教伝統の中でサラがイエスの母マリアと結びつけて語られるようになっており、サラの笑いもその文脈で解釈すべきであると主張している（G. S. Reynolds, *The Qur’ān and its Biblical Subtext,* pp. 87–97）。

44 『クルアーン』11章72節。

45 『旧約聖書』「創世記」19章1–3節では、ロトが客に食事を用意したとされているのみであり、ロトの妻については直接言及されていない。英訳の注釈は、ロトの妻がソドムの町の人々に客の来訪を知らせるべく煙を上げたとする説と、炊事のために上げた煙が結果的に町の人々に客の来訪を知らせてしまったとする説があると述べている（E: 281, n. 80）。

46 『クルアーン』15章68節。

47 『クルアーン』11章81節。

48 『クルアーン』11章82節、15章74節では、町の天地を逆転させ、さらにその上に泥の石を降らせたと描写されている。

神はアブラハムにサラの息子イサクをもたらした。人々はこれに驚き「100歳の老爺と90歳の老婆だぞ」と言った。イサクはアブラハムによく似て生まれ出た。

アブラハムはイシュマエルとその母（ハガル）のもとをよく訪れていた。イシュマエルは成長して一人前の男性になった。そして彼はジュルフム族[49]の女性と結婚した。ある時、アブラハムが彼のもとを訪ねたが、彼に会えなかった。彼の母は既に亡くなっていた。そこでアブラハムは彼の妻と会話をしたが、彼女の知性に満足しなかった。彼がイシュマエルについて彼女に尋ねたところ、彼女は「羊の番をしています」と言った。すると彼は「彼が戻ったら、お前の門の敷居を変えなさいと伝えなさい」と言った。イシュマエルが羊の番を終え（て帰ってく）ると、妻は彼に「ある老人があなたを訪ねてきました」と言った。イシュマエルは「その人はあなたに何を言ったのか」と言った。彼女は「彼は言いました。お前の門の敷居[50]を変えなさいと伝えなさい」と言った。彼は「あなたとは離婚だ」と言った。そして彼は彼女と離婚し、ジュルフム族のムダードMuḍāḍの娘であるハイファーal-Ḥayfā’[51]と結婚した。一年後、アブラハムはまた彼らのもとを訪れた。彼がイシュマエルの家の前に立ったところ、イシュマエルの姿は見えず、彼の妻がいた。アブラハムは「暮らしぶりはどうか」と言った。彼女は「元気にやっています」と言った。彼は「それは結構。[25]それでお前の主人はどこに」と言った。彼女は「今はここにおりませんので、（家の中で）お待ちください」と言った。彼は「それはできない」と言った。彼女は「お顔をこちらへ。口づけをしたいのです」と言った。彼は言われたようにした。そして彼は言った。「お前の主人が戻ったら、よろしく伝えなさい。そしてお前の門の敷居をしっかりと保持しなさい、と言いなさい」と。アブラハムが去るとイシュマエルが帰ってきたので、彼の妻はアブラハムの件について彼に伝えた[52]。すると彼はアブラハムの足があった場所に屈み、敷居に口づけをした。

神は、カアバKa‘ba[53]を建造し、その基礎を高くし、そして人々に巡礼を呼びかけて儀式（のや

---

[49] カフターンの子ジュルフムを名祖とするアラブ部族。ジュルフム族の指導者ムダード・ブン・アムルの娘とイシュマエルが結婚したことにより、ジュルフム族は彼とその母を庇護するようになったとされる。また、ムダードは同じくメッカにいたカトゥーラー族とカアバ神殿の管理権をめぐって争い、これに勝利した。これによりジュルフム族はメッカの支配権を得たが、後にキナーナ族とフザーア族によってメッカから追放された。（『預言者ムハンマド伝』1: 7, 98; W. Montgomery Watt, “Djurhum,” *EI*²）。

[50] マンチェスター写本では‘atab-kaとなっているが、ケンブリッジ写本では‘atabaとなっており（M: 5b; C: 8a）、刊本では後者に従い‘atabaと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[51] 『預言者ムハンマド伝』では彼女の名は「ラアラRa‘la」となっている（『預言者ムハンマド伝』1: 7）。

[52] マンチェスター写本ではkhabbarat-huとなっているが、ケンブリッジ写本ではfa-akhbarat-huとなっており（M: 5b; C: 8a）、刊本では後者に従いfa-akhbarat-huと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[53] メッカの聖モスクのほぼ中心にある石造りの立方体の神殿。正面の入り口は地上2mの高さにある（森伸生「カアバ」『岩波イスラーム辞典』）。ヤアクービー『歴史』においては、「カアバ神殿」という名は言及されないものの、既にアダムによってメッカに神殿が建設されたことが記されている（L: I, 3;「『歴史』訳注（1）」p. 138）。

り方）を示すよう、アブラハムに命じた[54]。そこでアブラハムとイシュマエルは基礎を作り、石[55]の部分に達した。するとアブー・クバイス山Abū Qubaysがアブラハムに向かって[56]「私のもとにはお前に預けるものがある」と叫び、彼に石を与えた。そこで彼はその石を（カアバに）設置した。そしてアブラハムは人々に巡礼を呼びかけた。タルウィヤの日yawm al-tarwiya[57]になると、ジブリールが彼に「水をとりなさいtarawwa[58]」と言った。このため、その日はタルウィヤと呼ばれるようになった。やがてアブラハムがミナーにやってくると、ジブリールが彼に「ここで一夜を過ごしなさい」と言った。そして彼はアラファートにやってくると、そこに白い岩でモスクmasjid[59]を建て、そこで正午の礼拝と午後の礼拝を行った。その後ジブリールがアブラハムにアラファートを示して、「これがアラファートである。知りなさいi‘raf」と言った。こうしてその地はアラファートと呼ばれるようになった[60]。その後、ジブリールはアブラハムをアラファートから押し出したafāḍa[61]。そしてアブラハムが二つの隘路[62]に面した時、ジブリールは「進みなさいizdalif」と言った。こうして

---

54 タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では神がアブラハムにサキーナ（注190参照）を下して、ないしはジブリールを遣わしてカアバの建造を命じたという話が語られている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 274）。

55 カアバの黒石のこと。現在はカアバの東角、地上1.5mの所にはめ込まれている（森伸生「カアバ」『岩波イスラーム辞典』）。伝承ではアダムが地上に追放された際に神が天上から与えたとされる。ノアの時代の大洪水で行方不明になっていたが、このアブラハムによるカアバ建造に際して戻ってきた。なお、元来は白色であったが、後にメッカが多神教信仰に染まったためその罪によって黒く染まったともされる（A.J.Wensinck-［J. Jomier］, “Ka‘ba,” *EI*[2]）。また、ヤアクービー『歴史』では後述のようにアブー・クバイス山がアブラハムに黒石をもたらしたとされているが、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではアブラハムに黒石をもたらしたのはジブリールないしは正体不明の何者かとされている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 274–277）。

56 両写本では「アブー・クバイス山がAbū Qubays」となっているが（M: 5b; C: 8a）、刊本では、アブラハムを主語ととり「アブー・クバイス山にAbā Qubays」と直されている。ここでは両写本に従った。

57 ヒジュラ暦のズー・アルヒッジャ月8日のこと。イスラームのハッジ（大巡礼）における一連の行事の開始日。この日に巡礼者はメッカを出てミナーの谷へ向かっていく。したがって巡礼者はこの日までにメッカに入り、カアバでの諸儀礼（カアバの周囲を7周するタワーフの儀礼など）を済ませておかなければならない（大塚和夫「巡礼」『岩波イスラーム辞典』; R. Paret-［W. A. Graham］, “Tarwiya,” *EI*[2]）。

58 アラビア語で「タルウィヤtarwiya」と「水を取りなさいtarawwa」はともに同じ語根RWYから派生した語である。

59 9世紀のメッカ地方誌、アズラキー『メッカの諸情報』は、アラファのお立ち所の右手にあるモスクが、アブラハムのモスクmasjid Ibrāhīmと呼ばれていることを伝えている（al-Azraqī, *Akhbār al-Makka*, ed. ‘Abd al-Malik b. ‘Abd Allāh b. Duhaysh, s.l.: Maktabat al-Asadī, 2003, p. 815）。これは今ナミラ・モスクmasjid Namiraと呼ばれているが、マムルーク朝期の官僚・著述家であったウマリーは『諸都市の諸王国に関する視覚の諸道』において、ナミラ・モスクが、アブラハムがそれを建設したと言われていることを述べた上で「しかしそれは正しくないwa-lā yaṣaḥḥu hādhā」と述べている（al-‘Umarī, *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār*, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 2010, vol. 1, p. 197）。

60 アラビア語で「知りなさいi‘raf」と「アラファート‘Arafāt」はともに同じ語根‘RFから派生した語である。

61 このアラファートから「押し出したafāḍa」という表現は『クルアーン』2章198–199節にもある。一連の巡礼行事の中で、9日の日没時に巡礼者たちがアラファートからムズダリファへ一斉に移動することをイファーダifāḍaという（A.J.Wensinck-［J. Jomier］, “Ḥadjdj,” *EI*[2]）。

62 原語はal-ma’zimayn。ヤークート『諸国集成』では「マアズィマイン」という地名とみなされているが（Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 5, p. 40）、ここでは普通名詞として解釈した。

その地はムズダリファal-Muzdalifa[63]と呼ばれるようになった[64]。またジブリールは「二度の礼拝を一度にしなさいijma‘」と言った。こうしてその地はジャムウJam‘とも呼ばれるようになった[65]。アブラハムがマシュアルal-Mash‘ar[66]に至って、そこで眠ったところ、神は彼の息子を犠牲に捧げるよう彼に命じた[67]。

ところで、（この息子が）イシュマエルなのかイサクなのかについては見解が分かれている。ある人々は、それはイシュマエルだったと言う。というのも、彼こそが家dār-huと神殿bayt-huを建てた者であり、その時イサクはシリアにいたためである。別の人々は、それはイサクだったと言う。というのも、アブラハムはイシュマエルとその母（ハガル）を出て行かせたためである。また、この時イサクは少年ghulāmだったが、イシュマエルはすでに子を儲けた成人だったためである。この２人については多くの話がすでにあり、人々は２人に関して見解が分かれている。

さて、朝になるとアブラハムはミナーにやってきて、息子ghulāmに「私を神殿まで先導しなさい」と言った。そして彼は息子に「神はお前を犠牲に捧げるよう私に命じた」と言った。すると息子は「**《わが父よ、あなたが命じられたことをなしてください》**[68]」と言った。そこでアブラハムは短剣を手に取り、息子をジャムラ・アルアカバJamra al-‘Aqaba[69]の上に横たわらせ、［26］その身の下にロバの鞍布qurṭānを敷いた。そしてアブラハムは息子の喉に刃をあてて、息子から顔を背けた。

---

63 ミナーからアラファートまでの間の、約9kmの谷間。巡礼行事において9日日没時にアラファートからやってきた巡礼者たちはムズダリファで一夜を過ごす。（森伸生「ムズダリファ」『岩波イスラーム辞典』; F. Buhl, “al-Muzdalifa,” *EI*^{2}）。

64 アラビア語で「進みなさいizdalif」と「ムズダリファal-Muzdalifa」はともに同じ語根ZDLFから派生した語である。

65 アラビア語で「一度にしなさいijma‘」と「ジャムウJam‘」はともに同じ語根JM‘から派生した語。アラファートで行わなかった日没の礼拝を、ムズダリファでの夜の礼拝とまとめて同時に行う事を指す。

66 中田考監修『日亜対訳クルアーン』では「聖標」と訳されており、その注釈でムズダリファのクザフと呼ばれる丘のことであると説明されている（中田考監修『日亜対訳クルアーン』p. 60, n. 187）。また英訳では「道標Waymark」と訳されており、その注釈では道しるべ、ないしは宗教儀礼を行う場所を意味すると推測されている（E: 283, n. 93）。

67 アブラハムによって犠牲に捧げられる息子について、『旧約聖書』「創世記」22章ではイサクだとされる。『クルアーン』37章100–112節ではイシュマエルの名は明記されていないが、このアブラハムによる息子の犠牲の話に続いてイサクの誕生が述べられていることから、アブラハムが犠牲として捧げようとしたのはイシュマエルだと考えることもできる。なお、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』やマスウーディー『黄金の牧場』もイサク説とイシュマエル説を並記している（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 290–310; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma‘din al-Jawhar*, ed. Ch. Pellat, Beirut: Manshūrāt Jāmi‘at al-Lubnānīya, 1965–1979, vol. 1, p. 51）。

68 『クルアーン』37章102節。

69 ジャムラとはミナーにある約200mの間隔で並んだ大・中・小の３つの石柱を指す。特に大ジャムラはジャムラ・アルアカバと呼ばれる。これらの石柱は悪魔を象徴しているとされ、これらの石柱に向かって石を投げることが巡礼行事に含まれている。ヤアクービーのテキストでは触れられていないが、アブラハムが息子を犠牲に捧げようとしたとき悪魔がささやいて邪魔をしたため、アブラハムはジャムラ・アルアカバで石を投げて悪魔を追い払ったと言われる（森伸生「ジャムラ」『岩波イスラーム辞典』；F. Buhl-［J. Jomier］, “al-Djamra,” *EI*^{2}）。

その時ジブリールが刃の向きを変えた。アブラハムが見ると、刃の向きが変わっていた。それが3度くり返された。すると次のような声が響いた。「**《アブラハムよ、確かにお前は夢（のお告げ）を真実とみなして実行した》**[70]」。ジブリールは少年を抱き上げた。そしてサビール山Thabīr[71]の頂きから雄羊が下りてくると、アブラハムは息子の代わりに雄羊を置いて犠牲に捧げた。

啓典の民は「それはイサクだ。アブラハムはシリアのアモリ人al-Amūrīyīn[72]の荒野にて、これをイサクに行ったのだ」と言っている。

さて、アブラハムが巡礼を[73]終えて出発しようとした時、息子イシュマエルに対し、聖なる神殿の周辺に住まうように、そして人々に彼らの行うべき巡礼と儀式を率いるよう言い遺した。さらにアブラハムは、神は彼の寿命を延ばす御方にして彼の子孫を繁栄させる御方であり、彼の子供たちに祝福と恵みをもたらす御方であることをイシュマエルに語った。

彼らがシリアに至る途上でサラは死んだ。アブラハムはケトラQiṭūra[74]と結婚した。彼女は彼との間に多くの息子を産んだ。すなわち、ジムランZimran[75]、ヨクシャンYuqshan、メダンMidan[76]、ミディアンMadyan、イシュバクYishbāq[77]、シュアハShūḥ[78]である[79]。そしてアブラハムは死んだ。それはアーブ月10日火曜日のことだった。彼の生涯は195年だった[80]。

アブラハムの子イサク

アブラハムがシリアで死ぬと、イサクが彼の後に指導者となった。イサクはベトエルBitū'īl[81]の娘リベカRifqāと結婚した。その後彼女は身ごもり、お腹が大きくなっていった[82]。すると神はイサクに「私は彼女の腹から二つの集団sha'bayn、二つの民ummatayn を生み出す。そして弟を兄よりも

---

70 『クルアーン』37章104–105節。

71 ミナーの北側に位置する山（P. Bearman et al., "Thabīr," *EI²*）。

72 アモリ人の名は、アッカド語、シュメール語テキストにおいて「西方」を意味する語に由来すると考えられ、『旧約聖書』においては、イスラエル以前のパレスチナ先住民の総称として用いられるか、あるいはカナン人、ヘテ人と並んでその一部として用いられる（R. Bach＋山我哲雄「アモリびと」『旧約新約聖書大事典』）。

73 マンチェスター写本ではmin ḥajj[i]-hiが繰り返されている（M: 5b）。

74 両写本ではQNṬWRYHとなっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではQiṭūraと直されている。ここでは刊本に従った。

75 両写本ではMRNとなっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではZimranと直されている。ここでは刊本に従った。

76 両写本ではMDYWNとなっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではMidanと直されている。ここでは刊本に従った。

77 両写本ではLisānとなっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではYishbāqと直されている。ここでは刊本に従った。

78 両写本ではSRḤとなっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではShūḥと直されている。ここでは刊本に従った。

79 アブラハムの息子たちの名前については『旧約聖書』「創世記」25章1–2節やタバリー『諸預言者と諸王の歴史』の記述を参照した（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 345）。

80 『旧約聖書』「創世記」25章7節ではアブラハムの生涯は175年とされる。また、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は200年ないし175年、マスウーディー『黄金の牧場』は175年としている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 349; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 51）。

81 両写本では بتواتدع となっているが（M: 5b; C: 8b）、刊本ではBitū'īlと直されている。ここでは刊本に従った。

82 マンチェスター写本ではwa-thaqulaとなっているが、ケンブリッジ写本ではfa-thaqulaとなっており（M: 5b; C: 8a）、刊本では後者に従いfa-thaqulaと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

強大にする[83]」という啓示を下した。リベカはエサウ‘Īṣū とヤコブ Ya‘qūb の双子を産んだ。エサウが先に［生まれ］[84]、その後にヤコブが生まれた。ヤコブの踵はエサウの踵に触れていた[85]。そのため彼はヤコブと名付けられた[86]。［27］イサクに息子が生まれた時、彼は60歳だった。イサクはエサウを愛し、リベカはヤコブを愛した。イサクはゲラルの谷 Wādī Jārar[87] に居を構えた。その時には彼の視力はすでに失われていた。彼は息子エサウに「お前の剣と弓を取り、行きなさい。そして私が食べる獲物を狩りなさい。そうすれば、私は死ぬ前にお前に祝福を与えよう」と言った。彼（エサウ）の母リベカはこれを聞き、ヤコブに「お前の父のために食べ物を用意しなさい。山羊の群れへ行き、2頭の雄の仔山羊を取り、食事を作るのです。そしてそれを父の近くへ持って行きなさい。そうすれば、祝福はお前に授けられるでしょう」と言った。ヤコブは「（そんなことをすれば）彼（イサク）が私を呪うのではないかと心配です」と言った。彼女は「もし彼がお前を呪ったならば、お前に対する呪いが私に降りかかりますように」と言った。そこでヤコブは出て行って2頭の雄の仔山羊を捕らえ、それらを屠り、料理し、それを持ってイサクへ近づいた。ところで、エサウは毛深い腕をしていた。そのためヤコブは2頭の雄の仔山羊の皮を剥ぎ、それで両腕を覆った。ヤコブが料理を父親のもとへ持って行くと、イサクは「声はヤコブの声だが、感触[88]はエサウの感触[89]だ」と言った。イサクはヤコブを祝福して彼のために祈り、「お前が兄弟たちを率いる長となるのだ」と言った。そしてエサウが獲物を手に帰ってきた。イサクは彼に「先に私に食事を持ってきた者は誰だ。その者を私は祝福してしまった。彼こそが祝福された者である」と言った。エサウは「弟のヤコブが私を騙ったのです」と言った。イサクは彼に「私はすでにヤコブをお前と兄弟たちを率いる長にしてしまった」と言った。するとイサクはエサウのために祈り、「お前は大地の高い場所[90]に住まうのだ」と言った。そしてイサクはヤコブに対し、ハッラーン Ḥarrān[91]へ向かい、アブラハム

---

83 『旧約聖書』「創世記」25章23節では同様の内容が語られているが、そこでは神がリベカに語ったものとされている。

84 両写本には「生まれwa-kharaja」の語はなく（M: 6a; C: 8b）、刊本ではこれが補われている。ここでは刊本に従った。

85 『旧約聖書』「創世記」25章26節ではエサウの踵をヤコブの手が掴んでいたとされている。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』でも、『旧約聖書』からさらに胎内でのエサウとヤコブの会話の描写が付け加えられた逸話が語られている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 358）。

86 アラビア語で踵‘aqib とヤコブ Ya‘qūb はともに同じ語根‘QB から派生した語である。英訳の注釈ではヘブライ語でも「ヤコブ」の名は「踵」に由来すると指摘されている（E: 285, n. 101）。

87 両写本では Jādar となっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本では Jārar と直されている。ここでは刊本に従った。

88 両写本ではal-miḥassaとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本ではal-masḥaと直されている。ここでは刊本に従った。

89 両写本では miḥassa となっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本では masḥa と直されている。ここでは刊本に従った。

90 両写本では SMRH となっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本では samīya と直されている。ここでは刊本に従った。ただし、マンチェスター写本では simna とも読める。『旧約聖書』「創世記」27章39節においては、イサクはエサウに「いや、お前の住む場所は地の（生み出す）油からも、上の天から降りる露からも隔たってしまうだろう」と言っている。英訳では、本文では「高い場所heights」としつつ、注釈において、ヘブライ語聖書およびシリア語聖書との比較から「肥沃な土地 samīna」と読むべきかと提案している（E: 285, n. 102）。

91 バリフ川上流に位置する町。『旧約聖書』「創世記」11章31節で、ウルからカナンへ移住したアブラハムが一時滞在した町として登場する（M.A. Beck＋吉田大輔「ハラン（地名）」『旧約新約聖書大事典』）。

の兄弟［であるナホルNāḥūr[92]の子ベトエル］の子ラバンLābānとともに[93]あるよう命じた。というのも、エサウがヤコブに敵対することをイサクは[94]怖れたからであった。そしてイサクは、カナンの一族Kan‘ānīyīnの女性とは結婚しないよう、ヤコブに命じた。その後、ヤコブはハッラーンへ向かい、母方のおじであるラバンのもとに行った[95]。イサクの生涯は185年[96]であった[97]。

［28］イサクの息子ヤコブ

イサクはヤコブに「神は既にお前を預言者になさり、お前の子孫を預言者になさった。また、かの御方はお前に恵みと祝福を授けられた」と言った。そしてイサクはヤコブに対し、シリアのパダンal-Faddān[98]へ行くよう命じた。かくしてヤコブはパダンへ行った。彼はその地に入ると、井戸のところに羊の群れを率いた1人の女性[99]がいるのを見た。彼女は羊たちに水を飲ませようとしていたのだが、男性数人がかりでなくては持ち上がらない岩が井戸の口を塞いでいた。彼は、彼女が何者であるかを尋ねた。彼女は「私はラバン[100]の娘です」と言った。ラバン[101]とはヤコブの母方のおじであった。ヤコブは岩をどかし、彼女に水を汲んでやり、母方のおじ（ラバン）のもとへ向かった[102]。するとラバンはヤコブに彼女[103]を嫁がせた。しかしヤコブは「私に定められているのは、彼

---

92 『旧約聖書』「創世記」11章27–29節に登場するアブラハムの兄弟。

93 両写本では‘inda wuld-hi lāyān b. Ibrāhīm akhī Isḥāqとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本では‘inda lābān b.［Bitū’īl b. Nāḥūr］akhī Ibrāhīm と大幅に直されている。ここでは刊本に従った。

94 両写本ではwa-khāfa ‘Īṣū ‘alay-hiとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本ではwa-khāfa Isḥāq ‘Īṣū ‘alay-hiと直されている。この文章の主語が不明瞭であるため、あえてIsḥāqを補ったものか。確かに主語はイサクであると考えられるため、ここでは刊本に従った。

95 イサクがヤコブをハッラーンへ行かせる話は『旧約聖書』「創世記」28章1–6節にもある。ただし、『旧約聖書』では地名はパダン・アラムとなっている。しかし同28章10節ではヤコブはハッラーンへ向かったとされている。ヤアクービー『歴史』のテキストでは、ここではハッラーンḤarrānとされているが、後段でヤコブはパダンal-Faddānへ行ったとされている。注98参照。

96 『旧約聖書』「創世記」35章28節は180年、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は160年、マスウーディー『黄金の牧場』は185年としている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 371; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 52）。

97 両写本ではfa-kānatとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本ではfa-kānaと直されている。ここでは両写本に従った。

98 パダンはユーフラテス川の支流バリフ川の上流地域にある都市ハッラーンの周辺を指す。ハッラーンもパダンもアッカド語で「道」を意味する語である（L. Delekat+菊池純子「パダンアラム」『旧約新約聖書大事典』）。なお、ヤークート『諸国集成』では、ハッラーンに属する村の一つqarya min a‘māl Ḥarrānであるとされている（Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 4, p. 96）。

99 ここでは明示されていないが、『旧約聖書』「創世記」29章1–14節ではこの女性は後述のラケルとされている。

100 両写本ではLāyānとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本ではLābānと直されている。ここでは刊本に従った。

101 両写本ではLāyānとなっているが（M: 6a; C: 8b）、刊本ではLābānと直されている。ここでは刊本に従った。

102 以上のヤコブとラケルの出会いの話は『旧約聖書』「創世記」29章1–14節にあるが、そこではヤコブが羊飼いたちのために石をどかした後に、ラケルが通りかかり、そこでヤコブは再び石をどかした上で、自らが親族であることを明かしている。

103 両写本および刊本ではīyā-hāとなっており（M: 6a; C: 8b）、これに従った。英訳では、『旧約聖書』「創世記」29章23節の記述を踏まえ、これを「レアLiyā」と直すべき可能性について言及している（E: 286, n. 104）。文

女の姉妹であるラケルRāḥīlです」と言った。ラバンは「この娘の方が年長なのだ[104]。加えてラケルもあなたに嫁がせよう」と言った。かくしてヤコブは姉妹２人と結婚した[105]。ヤコブはまずレアと床入りし、彼女との間にルベンRūbīl、シメオンShim‘ān、レビLāwī、ユダYahūdhā、イッサカルIshājar、ゼブルンZifūlūnという息子たち、そしてディナDīnāという娘を儲けた。その後、ヤコブの母方のおじ（ラバン）はもう一人の娘であるラケルを彼に嫁がせた。彼女にはなかなか子が産まれず、そのことが彼女に重くのしかかった。やがて神は彼女に[106]ヨセフYūsufとベニヤミンBinyāmīnをもたらした。ヤコブはレアの女奴隷jāriyaであったジルパZilfāと交わり、彼女との間にガドKādh、アシェルĀshar、ナフタリNaftālī[107]といった息子たちを儲けた。また、ヤコブはラケルの女奴隷walīdaと交わり、彼女との間にダンDān[108]という息子を儲けた。

ある人々が言うには、ヤコブはレアより先にラケルと結婚したという。また啓典の民によれば、彼は同時に２人と結婚し、ラケルが亡くなってレアが残ったという。

ヤコブの息子の中で最も彼に愛されていたのはヨセフであった。というのも、ヨセフは息子たちの中で最も美しい顔立ちをしており、彼の母親はヤコブの妻たちの中で最も愛されていたためである。ヨセフの兄弟たちはヨセフを妬んでいたので、ともに彼を連れ出した。彼らの話については偉大な神の書において既に神が語ったもの[109]がある[110]。それによると、ヨセフは売られて奴隷にされ、

字の判読としては無理があるものの、確かにこの後の話の流れを考慮すれば、この女性をレアとみなす方が適切であるかもしれない。この一連の記述では、代名詞である「彼女」の指すものが不明瞭であり、レアなのかラケルなのか判断の難しい文章になっている。

[104]『旧約聖書』「創世記」29章15–30節では、ヤコブがレアとラケルの姉妹と結婚するに至る過程が次のように語られている。妹であるラケルとの結婚を求めるヤコブに対してラバンは７年間仕えることを求め、ヤコブはそれを果たした。するとラバンはラケルではなく姉のレアをヤコブと結婚させた。異議を唱えるヤコブに対してラバンは「われわれの土地では姉より先に妹を嫁がせることはできない」と言い、さらに７年間仕えるならラケルも嫁がせることをヤコブに約束する。ヤコブはラケルとも結婚し、また７年間ラバンに仕えた。またタバリー『諸預言者と諸王の歴史』でも『旧約聖書』と同様の話が語られている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 355–356）。なお、マスウーディー『黄金の牧場』はこの逸話に関しては言及していない。

[105]『クルアーン』４章23節でには「また、２人の姉妹を併せることも（禁じられた）。ただし、すでに過ぎたことは別である」とされている。つまり、２人の姉妹と同時に結婚することは禁じられているが、ヤコブのこの結婚は例外とされている（E: 286, n. 105）。

[106] マンチェスター写本ではla-hāとなっているが、ケンブリッジ写本ではsubḥāna-hu ta‘ālāとなっており（M: 6a; C: 9a）、刊本では後者に従いsubḥāna-hu ta‘ālāと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

[107]『旧約聖書』「創世記」30章7–8節ではラケルの女奴隷ビルハが産んだ息子だとされている。

[108] タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではダンもジルパが産んだとする説も紹介されている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 356–357）。

[109] マンチェスター写本ではmā qad qaṣṣa-huとなっているが、ケンブリッジ写本ではmā qaṣṣa-huとなっており（M: 6a; C: 9a）、刊本では後者に従いmā qaṣṣa-huと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

[110]『クルアーン』12章8–21節では次のように語られている。ヤコブがヨセフを愛することを妬んだ兄弟たちは、彼を連れ出して井戸の中へ投げ込み、ヤコブにはヨセフが狼に食べられてしまったと報告した。そして隊商が通りがかってヨセフを井戸から引き上げて連れ去り、奴隷としてエジプトの者に売ってしまった。この経緯は『旧約聖書』「創世記」37章でも語られている。

父親から40年間離れることになったのであった。やがて神がヨセフをヤコブのもとへ戻し、神がその偉大な書において既に語られたように[111]、ヨセフは彼ら（ヤコブの一族）をエジプトに集めた[112]。エジプトではヨセフに[29]多くの息子たちが生まれた。ヤコブはエジプトに17年いた。死がヤコブに訪れると、彼はヨセフに対し、息子たちが自分をエジプトに埋葬しないよう言い遺して死んだ。彼は140歳であった[113]。

ヤコブの子孫

ヤコブには12人の息子がいた。ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル[114]、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン、ガド、アシェル、ダン、ナフタリである。これらがヤコブの息子たちである。彼らが神の[115]イスラエルIsrā'īl[116]の民、すなわち十二支族al-asbāṭ[117]である。ルベンの子はハノクKhanūkh、パルFalū、ヘツロンḤiṣrān、カルミKarmīである。シメオンの子はイェムエルYimū'īl[118]、ヤミンYāmīn、シャウルShāwūlである[119]。レビの子はゲルションJirshūn、ケハトQihath、メラリMirārīである。ユダの子はエル‘Ār、オナンŪnān、シェラShīlā、ペレツFāriṣ、ゼラハZāraḥである。イッサカル[120]の子はトラアTūla‘、プワFuwā、ヨブYūb、シムロンShimrūnである。アシェルの子は

---

[111] 『クルアーン』12章58–101節では次のように語られている。ヨセフはエジプトで成長し、やがて王に認められて国庫を預かる大臣となった。やがてヨセフは食料を求めてエジプトにやって来た兄弟たちと再会した。兄弟たちはかつての過ちを認め、ヨセフはヤコブと兄弟たちをエジプトに迎え入れた。この経緯は『旧約聖書』「創世記」42–46章でも語られている。

[112] 両写本ではjama‘a-hum Yūsufとなっているが（M: 6a; C: 9a）、刊本ではjama‘a-hum wa-Yūsufと直されている。ここでは両写本に従った。

[113] 『旧約聖書』「創世記」47章28節、およびタバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではともに147年とされているが、マスウーディー『黄金の牧場』ではヤアクービー『歴史』と同じく140年とされている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 371; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 52）。

[114] 初出の際にはIshājarという字形だったが、ここではYishājarという形になっている。

[115] 両写本ではIsrā'īl Allāhとなっているが（M: 6a; C: 9a）、刊本ではIsrā'īl と直されている。ここでは両写本に従った。ヤコブを指す際に「神のイスラエル」と「神」という形容をつける例はタバリー『諸預言者と諸王の歴史』にも見られる（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 442）。またタバリーのクルアーン注釈書『クルアーン章句解釈に関する解明集成』においては、モーセの系譜を示す部分で、「神の友アブラハムの子である神の犠牲イサクの子である神のイスラエル、ヤコブ（Ya‘qūb Isrā'īl Allāh b. Isḥāq Dhabīḥ Allāh b. Ibrāhīm Khalīl Allāh）」として、別名がそれぞれに付される形で登場する（al-Ṭabarī, *Jāmi‘ al-Bayān ‘an Ta'wīl Āy al-Qur'ān*, vol. 1, p. 666）。

[116] イスラエルは、『旧約聖書』の文脈では、「創世記」32章29節において、ヤコブが神から与えられた名として記述され、「神は戦う」という意味を持つ。ヤアクービー『歴史』のテクストでは、この神による名付けの物語を省略しており、後世に残った「ユダヤ教徒の宗教共同体」としての意味で用いられていると考えられる。

[117] ヤコブの息子たちを名祖とする、古代ユダヤ民族の12の部族集団。長老の元に統率されていたとされる。歴史的な実態としてはその成立の過程は様々であり、のちに『旧約聖書』にあるような形に整理された（K. D. Schunk + 並木浩一「部族」『旧約新約聖書大事典』）。

[118] 両写本ではNimwā'īlとなっているが（M: 6a; C: 9a）、刊本ではNimū'īlと直されている。ここでは『旧約聖書』「創世記」46章10節の読み方を踏まえ、Yimū'īlとするべきと判断した。

[119] 『旧約聖書』「創世記」46章10節では、他にオハド、ヤキン、ツォハルがシメオンの息子とされている。

[120] 初出の際にはIshājarという字形だったが、ここではYishājarという形になっている。

イムナYimnā、イシュワIshwā、イシュウィIshwī[121]、ベリアBirī‘ā[122]、セラハSāriḥ[123]である。ゼブルン[124]の子はセレドSārid、エロンĪlūn、ヤフレエルYaḥlā’īlである[125]。エジプトの地でヨセフにエフライムIfrā’īm、マナセMinashīが生まれた。ベニヤミンの子はベラアBāla‘[126]、ベケルBikhir、アシュベルAshbāl、ナアマンNa‘mān、エヒŪkhī、ムピムMufīm[127]、フピムḤufīm[128]、アルドArdである[129]。ガドの子たちはツィフヨンṢifyān[130]、シュニShūnī[131]、エツボンIṣbūn[132]、エリ‘Ārī、アロディArūdī、アルエリArāyillī[133]である[134]。ナフタリの子はヤフツエルYaḥṣīl、グニGhūnī[135]、イェツェルYiṣir[136]、シレムShālīm[137]である。以上がヤコブの子たち、および孫たちである。彼らはエジプトでヨセフのもとに集い、エジプトで生まれた彼の息子たちとともにあった。[30]彼は彼らに土地を与え、「耕作しなさい。収穫の五分の一はファラオFir‘awn[138]のものだ」と言った。

死がヤコブに訪れると、彼は息子たちおよび孫たちを集め[139]、彼らを祝福して祈り、各々に言葉をかけた。彼はヨセフに自らの剣と弓を与えた。ヨセフは自分の息子であるマナセとエフライム[140]を彼の近くに来させた。マナセの方が年長であったため、ヨセフはマナセをヤコブの右側に、エフ

---

121 マンチェスター写本では’SWYと、ケンブリッジ写本では’STWYとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではIshwīと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

122 両写本ではاربعاとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではBirī‘āと直されている。ここでは刊本に従った。

123 両写本ではSāriḥとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではSārikhと直されている。ここでは両写本に従った。

124 両写本ではZanūlūnとなっているが（M: 6b: C: 9a）、刊本では初出時と同様のZifūlūnと直されている。ここでは刊本に従った。

125 両写本ではエロンとヤフレエルの名前がなく、該当箇所にはwāとだけ記されているが（M: 6b; C: 9a）。刊本ではエロンとヤフレエルの名前が補われている。ここでは刊本に従った。

126 両写本ではTāla‘となっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではBāla‘と直されている。ここでは刊本に従った。

127 両写本ではMuqīmとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではMufīmと直されている。ここでは刊本に従った。

128 両写本ではḤuqīmとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではḤufīmと直されている。ここでは刊本に従った。

129 『旧約聖書』「創世記」46章21節では、他にゲラ、ロシュがベニヤミンの息子とされている。

130 両写本ではṢifyāとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではṢifyānと直されている。ここでは刊本に従った。

131 両写本ではSūtīとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではShūnīと直されている。ここでは刊本に従った。

132 両写本ではIṣyūnとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではIṣbūnと直されている。ここでは刊本に従った。

133 『旧約聖書』「創世記」46章16節では、他にハギがガドの息子とされている。

134 両写本ではこの後にアシェルの子たちが再度不完全な形で記されているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではその記述を省略している。ここでは刊本に従った。

135 両写本ではḤū’īとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではGhūnīと直されている。ここでは刊本に従った。

136 両写本ではYiṣirとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではYibṣirと直されている。ここでは両写本に従った。

137 両写本ではShālihとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではShālīmと直されている。ここでは刊本に従った。

138 アラビア語の「フィルアウンFir‘awn」は古代エジプトの支配者を指す用語で、そこには非情な専制君主のイメージが付与され、『クルアーン』のモーセ関連の記述の中にも登場する（大川玲子「ファラオ」『岩波イスラーム辞典』）。

139 マンチェスター写本ではjama‘a wuld^{a}-huの後にwa-wuld^{a}-huと補われているが、ケンブリッジ写本の欄外ではこれがjama‘a wuld^{a}-hu wa-wuld^{a} wuld^{i}-hiと訂正されており（M: 6b; C: 9a）、刊本では後者の訂正に従って翻刻されている。ここでは刊本に従った。

140 マンチェスター写本ではIfrātīmと、ケンブリッジ写本ではIfrāthīmとなっているが（M: 6b; C: 9a）、刊本ではIfrā’īmと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

ライムをヤコブの左側に行かせた。しかしヤコブは（左にいる）エフライムへ右手[141]を伸ばした。そしてヤコブはヨセフに対し、自分（の遺体）を運び出してアブラハムとイサクの墓の隣に埋葬するよう命じた。ヤコブが亡くなると彼らは泣き始め、それは70日間にわたった。そしてヨセフはエジプト人の若者たちを連れて彼の遺体を運び出し、パレスチナの地に至り、アブラハムとイサクの墓の隣に埋葬した。彼らがヤコブの埋葬を終えると、ヨセフは兄弟たちに「私とともにエジプトの地に帰ろう」と言った。しかし彼らは彼を恐れていた。彼らはヨセフに「あなたが私たちの過ちを赦すよう、あなたの父ヤコブはあなたに言い遺したはずです」と言った。彼は「私を恐れてはならない。というのも、私は神をこそ恐れるからだ」と言った。そのため彼らの心が安らかになり、エジプトの地へ帰ってそこに定着した。ヨセフは長らくエジプトで暮らした。その後彼に死が訪れた時、彼はイスラエルの民を集めて言った。「お前たちはいずれエジプトの地を出て行くだろう。それは神がヤコブの子であるレビの子孫からアムラム ʻImrānの子モーセ Mūsāという名の一人の男を遣わす時である。神はお前たちを忘れることなく、（パレスチナの地へ）上らせてくださるyarfaʻu-kumだろう[142]。その時、私の肉体をこの地から持ち出し、私の父祖の墓の近くに埋葬しなさい」と。そしてヨセフは死んだ。彼は110歳だった[143]。彼は石棺に納められ、ナイル川 al-Nīlに沈められた。

預言者ヨブ Ayyūbがこの時代に生きていた。彼は、アブラハムの子イサクの子エサウの子レウエル Riʻū’īl[144]の子ゼラ Zāraḥの子アモス Amūṣ[145]の子だった。彼は非常に裕福だった。神は、彼の犯した過ちのために彼に試練を課した。しかし彼は神に感謝をささげて耐えた。すると神は彼から試練を取り払い、彼の富を彼に戻して倍にした。

---

[141] 『旧約聖書』「創世記」48章13–14節参照。なお、左右を二項対立的にとらえて右に優位性を見出す観念はイスラームでも見られる。例えばモスクなどへの立ち入りは右足からとされたり、礼拝前の浄めは体の右側から始めるなど。右・左は優・劣、吉・凶、浄・不浄といった観念と対応している（鷹木恵子「右・左」『岩波イスラーム辞典』）。

[142] 『旧約聖書』「創世記」50章24節から文脈を補って訳した。

[143] 『旧約聖書』「創世記」50章26節およびマスウーディー『黄金の牧場』では110年（al-Masʻūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 52）、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では120年とされている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 412–413）。

[144] 両写本では ʻĀwīl となっているが（M: 6b; C: 9b）、刊本では Riʻū’īl と直されている。ここでは刊本に従った。

[145] この系譜のアモス以前は『創世記』に言及がない。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』はイブン・イスハークからの伝承では Ayyūb b. Mawaṣ b. Zāraḥ b. ʻĪṣ b. Isḥāq と、イブン・イスハーク以外のある者が伝える伝承では Ayyūb b. Mawaṣ b. Raʻwīl b. ʻĪṣ b. Isḥāq と伝える（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 361）。一方マスウーディー『黄金の牧場』は、Ayyūb b. Amūṣ b. Zāriḥ b. Riʻwīl b. ʻĪṣ b. Isḥāq b. Ibrāhīm としている（al-Masʻūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 53）。

［31］アムラムの子モーセ

ヤコブの子レビの子ケハト[146]の子アムラムの子であるモーセは、尊大なal-jabbārファラオであるワリード・ブン・ムスアブal-Walīd b. Muṣʻab[147]の時代にエジプトで生まれた。ファラオの名はザルミーẒalmīであったとも言われる。この当時イスラエルの民はエジプトにおり、ヨセフの頃から隷属し僕（しもべ）として暮らしていた。ところで、ファラオの魔術師たちsaḥaraと巫者たちkahanaはファラオに対して「当代において、イスラエルの民に１人の男児が生まれます。その者はあなたの支配を損なうでしょう。そして、その者によってあなたに破滅が生じます」と言っていた。ファラオは長きにわたってエジプトを支配し平和を享受しており、「**《われは至高なるお前たちの主である》**[148]」と言うほどであった。ファラオは命を下し、イスラエルの民の妊婦すべてに見張りを配置して、彼女たちのもとに男児が生まれたら、その男児をすべて殺害してしまった。さて、モーセの母に陣痛がはじまると、産婆は彼女に「あなたに起こることを隠しましょう」と言った。モーセの母が男児を産むと、産婆は見張りに対して「彼女から出てきたのは血だけでした」と言った。すると神は次のような啓示をモーセの母に下した。「箱を作って、その中にその子を入れなさい。そして夜にそれを持ち出し、エジプトのナイル川に投じなさい」と[149]。彼女はその通りにした。すると風がその箱を押し、河岸へ打ち上がらせた。そしてファラオの妻[150]が箱を目にし、その箱に近寄って手に取った。彼女が箱を開けてモーセに気づくと、彼女の内から彼に対する愛情が溢れ出た。彼女はファラオに「彼を私たちの息子としましょう」と言った。そして彼女は彼に乳を与える者を探した。しかし乳母はなかなか見つからず、最終的にモーセの母があらわれて、モーセは彼女から（乳を）得た。彼は類を見ないほどに美しい若者になり、普通の男児ではあり得ないほどの速さで成長した。

ところで、ヨセフはかつてイスラエルの民に次のように言っていた。「ヤコブの子レビの子孫で、

---

146 両写本ではQāhathとなっているが（M: 6b; C: 9b）、刊本ではQihathと直されている。ここでは刊本に従った。

147 ヤアクービー『歴史』のエジプト史部分にも彼の記述があり、アマレク人の諸王ののち、Kāsim b. Maʻdānが王となり、その後にワリードが王となったことが記されているほか、彼の出自について、彼がアラブのラフム族であるとか、それ以外のヤマンの部族出身であるとか、アマレク人の一人であるなど、諸説あることが記されている（L: I, 211）。一方、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では、Qābūs b. Muṣʻab b. Muʻāwiyaの兄弟であり、彼の後を継いでファラオになったことがモーセに関する情報の中に記されている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, pp. 444–445）ほか、al-Walīd b. Rayyānとして言及される箇所もある（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 378, 386）。ただしタバリーのクルアーン注釈書『クルアーン章句解釈に関する解明集成』には言及が見当たらない。マスウーディー『黄金の牧場』は、ヤアクービーと同じく単にモーセの時代のエジプト王はal-Walīd b. Muṣʻab b. Muʻāwiya b. Abī Numayr b. Abī al-Hilwās b. Layth b. Hārān b. ʻAmr b. ʻImlāqとし、アマレク人の子孫として伝えている（al-Masʻūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 2, p. 86）。

148 『クルアーン』79章24節。

149 『クルアーン』20章39節参照。『旧約聖書』「出エジプト記」2章1–4節ではモーセの母は神の啓示によらずにこの行動をとったとされている。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではヤアクービー『歴史』と同じくモーセの母に神の啓示が下されたとされている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 448）。

150 『旧約聖書』「出エジプト記」2章5–10節では妻ではなく娘とされており、『クルアーン』28章8節では妻とされている。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』でも妻とされており、アースィヤĀsiyaという名のイスラエルの民の女性とされている（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, pp. 445, 448）。

アムラムの子モーセという名の巻き毛の少年があらわれるまで、あなたたちの苦痛が止むことはない」と。イスラエルの民の置かれた状況が長引くと、彼らは（不満を）叫んだ[151]。そして彼らは自分たちの長老の一人のもとにやってきた。すると長老は彼らに「まるであなたたちは（予言された）彼とともにいるかのようではないか」と言った。そのことについて彼らが話をしていると、彼らのそばにモーセが立った。［32］長老は彼を見ると、その特徴を彼が備えていることに気づいた。長老はモーセに「あなたの名前は何というのか」と言った。モーセは「モーセだ」と答えた。長老は「誰の息子か」と言った。モーセは「アムラムの息子だ」と答えた。すると長老と人々は立ち上がり、モーセの両手と両足に口づけをした。そしてモーセは彼らを（自身の）支持者shī‘aとした。ある日、モーセはエジプトのとある町に入った。すると支持者の一人がファラオの一族の者と争っていた。**《そこで、モーセは彼を拳で打って》**[152]、殺害してしまった。ファラオとその一族は彼のことを警戒するようになり、彼を殺害しようとした。モーセはそれを知ると、単身で一目散に（街から）出て、ミディアン（の地）Madyan[153]に至った。彼はアブラハムの子ミディアン[154]の子アイヤー‘Ayyā[155]の子ヌワイブNuwayb[156]の子である預言者シュアイブShu‘ayb[157]のもとで、彼の2人の娘の内の1人と結

---

[151] 『旧約聖書』「出エジプト記」2章23節において、イスラエルの民が労働のために呻き叫んだところ、神がそれを聞いて自らを知らしめるという一段があるが、これはモーセがエジプト人を殺してミディアンのもとへ身を寄せたという記述の後に置かれている。

[152] 『クルアーン』28章15節。

[153] ミディアンは、『旧約聖書』に登場する遊牧民の部族連合。アブラハムとケトラの子孫とされている。その居住地域を特定するのは困難であるが、パレスチナ南部の地域であるとされる（R.Bach＋山我哲雄「ミデアン」『旧約新約聖書大事典』）。

[154] 両写本ではMidānとなっているが（M: 7a; C: 10a）、刊本ではMadyanと直されている。ここでは刊本に従った。

[155] 両写本および刊本では‘Ayyāとなっており（M: 7a; C: 10a）、これに従った。ただし刊本の註釈ではタバリーやマスウーディーではアンカー‘Anqāとなっていると指摘されている。

[156] 両写本ではNūnabとなっているが（M: 7a; C: 10a）、刊本ではNuwaybと直されている。ここでは刊本に従った。

[157] 『クルアーン』（7章85–93節、11章84–95節など）およびイスラームの伝承においてマドヤンMadyan（ミディアン）の民に送られた預言者とされる人物。『旧約聖書』「出エジプト記」2章15–21節においては、モーセがマドヤンのもとに身を寄せた時に、ミディアンの祭司の娘を妻としたことが書かれているが、『クルアーン』中の記述においても、シュアイブをモーセと結びつける要素は見られない（R. Tottoli, “Shu‘ayb,” *EQ*）。しかし、後世の歴史書や預言者物語Qiṣaṣ al-Anbiyā’においては、ヤアクービー『歴史』同様、モーセがマドヤンの民のシュアイブに身を寄せ、彼の娘を娶るという伝承は一般的なものとなる（al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab,* vol. 1, p. 54）。なおタバリー『諸預言者と諸王の歴史』においては、「イブン・イスハーク以外の者」が伝えた伝承では、モーセの妻が「エトロ、すなわち預言者シュアイブの娘」であるとしており（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 443）、アブー・ウバイダ・マアマル・ブン・ムサンナーを起点とする伝承では、エトロがシュアイブの甥であるとしているが、その一方で、エトロとシュアイブの関係に触れない伝承も採録している（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 443）。

　またシュアイブの系譜については、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は「トーラーの民」の説として、Shu‘ayb b. Sayfūn b. ‘Anqā b. Thābit b. Madyan b. Ibrāhīm、イブン・イスハークの説としてShu‘ayb b. Mīkā’īlを挙げている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 365）。一方マスウーディー『黄金の牧場』はShu‘ayb b. Nuwayl b. Ri‘wā’īl b. Murr b. ‘Anqā b. Madyan b. Ibrāhīmとしている（al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 54）。

婚するという条件で雇われた。**《モーセは年季を満了し》**[158]妻を連れて聖なる家bayt al-maqdis[159]へと旅立った。これらのことは偉大なる神の書において神がモーセに関する話の中で語ったものである。モーセが旅路を歩んでいたところ、火を見つけて、家族を後ろに残してその火の方へ向かった[160]。彼がそこに近づいてみると、一本の木が根元から先まで火に包まれていた。彼が（さらに）近づこうとすると、彼の魂は進もうとしなかった。彼は恐れを感じ、彼の恐怖は強まった。すると神が彼に呼びかけた。「**《モーセよ、恐れてはならない。まことに、お前は安全な者たち（の一人）である》**[161]」と。これにより彼の恐怖が落ち着いたところで、神は彼に杖を投げるよう命じた。彼は杖を投げた。するとその杖は木の幹のような大蛇となった。神はそれを手に取るよう彼に命じた。するとそれは杖になった。そして神は彼をファラオのもとへ遣わしたのである。神は彼（モーセ）にファラオのもとへ行き、彼に神への崇拝を呼びかけるよう命じたのであった。このことがモーセの心に重くのしかかった。神は言った。「私はお前に、私の僕（しもべ）たちの一人（ファラオ）のもとへ行くことを命じる。その者は私の恩恵を無視し、私の策略から逃れられると思っており、さらには私のことを知らぬと言った。わが威光にかけて誓おう。私と私の創造物の間に私が定めた正義と証がなければ、私はその憤怒によって天も地も怒り狂う制圧者の一撃をもって、その者を打ち倒す」と。モーセは「おお、神よ。私の兄弟アロンHārūnをもって私の腕を強くしてください。**《私は彼らのうちの一人を殺しました。そのため、彼らが私を殺すことを恐れます》**[162]」と言った。[33]神は彼に言った。「私は既にそれを行った。**《お前とお前の兄で、わが諸々の徴を携えて行け》**[163]。そしてイスラエルの民を連れて出なさい。いまや彼らを隷属と服従から放つ時だ」と。そこでモーセは妻を彼女の父のもとへ帰し、彼と彼の兄弟[164]アロンはファラオのもとに向かった。モーセはアロンに、

---

[158]『クルアーン』28章29節。

[159] アラビア語の「聖なる家bayt al-maqdis」は一般にエルサレムを指すが、モーセがエルサレムに行ったという記述は見当たらない。『クルアーン』28章29節ではトゥール（シナイ山）を経ている描写がされているが、聖なる家についての言及はない。『旧約聖書』「出エジプト記」3章2節では「茨の灌木」に対して、注釈で「原語セネーはシナイと音が似ている」とある（『旧約聖書Ⅰ律法』「出エジプト記」p. 147, n. 15）が、聖なる家についての言及はない。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』でも、この時のモーセがエルサレムに向かったとする記述はない。しかし英訳の注釈ではこのヤアクービー『歴史』の記述は、聖なる家から火がやってきてエジプトの家々を打ち倒すというファラオの夢が、エジプトを亡ぼす者がエルサレムから到来すると読み解かれた話（al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 447）をなぞったものであると解釈し、モーセが目的地とした聖なる家はエルサレムを指すと推測している（E: 290, n. 117）。

[160] 以下の場面については、『クルアーン』20章10–48節、27章7–13節にも同様の記述がある。

[161]『クルアーン』28章31節。ただし、「モーセよ」の後の「近く寄れaqbil」および接続詞のwaについては、ヤアクービーのテクストでは脱落している。一方、『クルアーン』27章10節では前半部分はヤアクービーのテクストと同様であるものの、その後は「使徒たちはわれの前では恐れないものである」と続いている。

[162]『クルアーン』28章33節。

[163]『クルアーン』20章42節。

[164] 両写本ではakhā-huとなっているが（M: 7a; C: 10a）、刊本ではakhū-huと直されている。ここでは刊本に従った。

神が彼を遣わすにあたって与えたものについて知らせた。そして、アロン[165]がイスラエルの民に（そのことを）伝えると、彼らは大いに喜んだ。ヨセフが真実を語っていたことを彼らは知ったのである。

そして彼らはファラオの門のところにやって来た。モーセは羊毛の長衣をまとい、腰には繊維を編んだロープを結び、手には杖を持っていた。彼は中に入ることを拒まれたが、彼が杖で門をたたいたところ、諸門は次々と開いた。かくして彼は入っていき、ファラオに向かって「私は**《諸世界の主の使徒である》**[166]。主は、あなたが主を信仰するように、また私とともにイスラエルの民を送り出すように、私をあなたのもとへ遣わした[167]」と言った。ファラオはこの言葉を重くみて「お前が真実を語ったのだとわかるような徴を示せ[168]」と言った。そこで彼は杖を投げた。すると、それは口を開いた大蛇となった[169]。その蛇がファラオの方へ近づいていったので、ファラオはそれ（蛇）から自分を守るようモーセに求めた。そこでモーセは胸元に手を入れて、白癩でもないのに白くなった手を出した[170]。ファラオがモーセを信じようとしたところ、ハマンHāmān[171]が「王よ、あなた様の

---

[165] 原文では主語が明示されておらず、モーセなのかアロンなのか判断しがたいが、『旧約聖書』「出エジプト記」4章30節の記述により、この主語はアロンであると判断した。

[166] 『クルアーン』26章16節。ただし、それはモーセとアロンの2人がそう言うよう神が命じている場面である。また、『クルアーン』7章104節では「諸世界の主からの使徒rasūl min rabb al-ʻālamīna」となっているが、それはモーセの発言である。

[167] 『クルアーン』7章105節では「私とともにイスラエルの民を行かせよarsil maʻī banī Isrāʼīl」、26章17節では「われらとともにイスラエルの民を行かせよarsil maʻnā banī Isrāʼīl」となっているが、ヤアクービーでは動詞がtabʻathuとなっている。

[168] 『クルアーン』7章106節では「もしお前が徴とともに来たのなら、それを見せよ。もしお前が真実を語るものたち（の一人）ならば」となっているが、ヤアクービーでは「徴」や「真実」といった用語は一致するものの構文が異なっている。一方同様の内容を伝える26章31節では「徴」の語がない。

[169] 『クルアーン』7章107節、26章32節では「それは明らかな蛇であったhiya thuʻbān mubīn」となっているが、ヤアクービーではhiya thuʻbān ʻazīm qad fataḥa fāhと蛇の修飾が異なっている。

[170] 『旧約聖書』「出エジプト記」4章6節参照。神によってモーセの手が白くなるという描写は『クルアーン』7章108節、26章33節にもある。また27章12節、28章32節では「悪疫でもないのにmin ghayr sūʼ」という文言が加えられている。ヤアクービーの「白癩sūʼ baraṣ」や『クルアーン』の「悪疫」に相当する語は『旧約聖書』の「ツァーラアト」だと考えられる。「ツァーラアト」とは祭儀的に穢れたものと見なされる皮膚疾患の総称のことであり、かつては「らい病」と訳されることもあったが、現在ではいわゆる「ハンセン病」ではありえないとされている（『旧約聖書Ⅰ律法』「補註　用語解説：ツァーラアト」p. 18）。また、「ツァーラアト」の諸症状については『旧約聖書』「レビ記」13章1–46節で述べられている。

[171] ハマンは『クルアーン』において、28章6、8、38節、29章39節、40章24、36節と6度にわたて言及される人物であり、いずれもモーセの時代のエジプトのファラオの近臣として描写されている。この人物は主に近代以降の欧米の学者たちの間で『旧約聖書』「エステル記」に登場するペルシアの宰相ハマンを起源とするものかどうかが議論されてきた。一方で、この人物は「エステル記」のハマンとは別の人物であるという見解も根強く、その名前を古代エジプトにおいてファラオに次ぐ位置を占めた高位の神官職Hā-Amenが転訛したものであるという説もある。これらに対してシルバースタインは、ハマンは『旧約聖書』「エステル記」も含めて、メソポタミアに端を発する、非歴史化され様々な物語に現れうる存在であったという見解を提示している（A. Silverstein, “Hāmān’s Transition from Jāhiliyya to Islām,” *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 34（2008）, pp. 285–308）。なお、ヤアクービーのテクストで語られる物語は、『クルアーン』に直接基づいたものではない。

僕(しもべ)たちの中にこれと同じことをなす者がいるではありませんか」と言った。そこでファラオは国中から魔術師たちを集めた。彼らはモーセのなしたことについて知らされた。彼らは時間をかけて、牛の革で中空の縄と中空の杖をつくり、それらに装飾を施し、それらの中に水銀をいれた。そして、彼らは杖と縄を投じようとしている場所を熱した。後日、ファラオが座を設けてモーセを連れてこさせた。魔術師たちが縄と杖を投じると、水銀が熱せられて動き、縄と杖が進んだ[172]。そこでモーセが自分の杖を投げた。するとその杖がそれらのすべてを何も残さず食べてしまい、魔術師たちは後ずさった。ファラオは彼らを殺した。神は諸々の徴とともにモーセをファラオに遣わしていた。すなわち杖、[34] 彼の胸元から出した白く輝く手、イナゴ、シラミ、カエル、血、初子たちの死[173]であった[174]。こうしたことが彼ら（ファラオとその一族[175]）にあらわれると、ファラオはモーセに「**《もしお前がわれらから天罰を取り除いたなら》**[176]、我々はお前のことを信じ、お前とともにイスラエルの民を出て行かせよう」と言った。神は彼らから天罰を取り除いたが[177]、彼らは信じなかった。神はイスラエルの民を出て行かせるようモーセに命じた。

彼ら（イスラエルの民）が出発しようとしていた時、モーセはヤコブの子ヨセフの遺体を探した。それは、ヨセフがイスラエルの民に言い遺した通りに、遺体を持って行くためであった。するとヤコブの子アシェル[178]の娘セラハ[179]が彼のもとに来て、「あなたが私の無事baqāʾ[180]を保障してくださるならば、私があなたをヨセフのもとまで案内しましょう」と言ったので、彼は彼女にそのことを保障した。そして彼女は彼を連れてナイル川のとある場所にやって来て、「それはここです」と言った。モーセは4枚の金の板を取り出した。その一枚には鷲を、別の一枚は獅子を、また別の一枚には人間を、さらに別の一枚には雄牛を描いた。また、至大なる神の御名をそれぞれの板に記した。モーセがそれらを水へ投げたところ、ヨセフの遺体が収められた石棺が浮き上がった。モーセの手

---

172 『クルアーン』20章66節、26章44節など。

173 神がエジプトで生まれたすべての初子を死なせたことを指す。『旧約聖書』「出エジプト記」11章1–10節参照。「出エジプト記」において初子とは長男を指す（「出エジプト記」13章15節参照）。

174 『クルアーン』7章133節では洪水、イナゴ、シラミ、カエル、そして血が列挙されている。

175 原文では何を指すのか明示されていない。『クルアーン』7章130–134節ではファラオの一族を、『旧約聖書』「出エジプト記」7–11章ではエジプトの人々を指している。ここでは『クルアーン』の文脈に従って補足した。

176 『クルアーン』7章134節。

177 両写本ではkashafa-huとなっているが（M: 7b; C: 10a）、刊本ではkashafaと直されている。ここでは両写本に従った。

178 両写本ではA‘shārとなっているが（M: 7b; C: 10b）、刊本ではĀsharと直されている。ここでは刊本に従った。

179 両写本および刊本ではShāriḥとなっているが（M: 7b; C: 10b）、ここでは既出の「セラハSāriḥ」と同一人物だと解釈した。

180 英訳の注釈では、この場面について、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では二つの伝承が述べられていることが指摘されている（E: 291, n. 122）。一つはイスラーイーリーヤート（ユダヤ教徒からイスラーム世界に取り入れられた『旧約聖書』に関連する伝承）であり、この女性がモーセに「楽園行き」を求めたとされている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 482–483）。もう一つはアラブの伝承として、女性は自分をエジプトに置いていかないようモーセに求めたとされている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 486）。

には雄牛の描かれた一枚が残った。彼はそれをアシェル[181]の娘セラハ[182]に与えて、棺を運び出した[183]。

かくしてモーセはイスラエルの民とともに（パレスチナへ）戻っていった。彼らには60万人の成人がいた[184]。ファラオとその軍勢がモーセの後を追ったが、神は彼らすべてを（海に）沈めた。彼らは100万騎であった。

また、ファラオとその配下の者たちがモーセたちの後を追って（海に）入ろうとしていた時に、ジブリールが降りてきたとも言われている。ファラオの騎兵たちが1騎も（海を）渡っていなかったところに、ジブリールが降りてきた。ジブリールは雌の仔馬に乗っており、ファラオは尾の長い馬に乗っていた[185]。ジブリールは海に入っていった。ファラオの馬はジブリールの雌の仔馬を見て、その後を追って海へと突進し、配下の者たちもファラオの後に続いた。こうして彼ら全員、すなわちファラオもその配下の者たちも沈んだ。彼らの頭上を海が覆ったのであった。そしてモーセは荒野tīhにたどり着いた。

イスラエルの民はモーセに、聖なる地に入るよう急き立て始めた。[35]すると神はモーセに、**《そこは彼らに対して40年間禁じられたもの》**[186]という啓示を下した。そのため彼らは荒野に留まった。激しい渇きが彼らをおそったところ、神はモーセに対し、彼の杖で岩を叩くよう啓示を下した。モーセは怒って立ち上がり、石を叩いた[187]。**《すると、そこから12の泉が湧き出た》**[188]。（イスラエルの民の）各支族sibṭに一つの泉があるということになり、彼らはそこから（水を）飲んだ。その後で神はモーセに次のように啓示を下した。「お前は私の栄光を称える前に石を叩いた。私の名を唱えてもいなかった。それゆえ、お前もまた荒野から出てはならない」と。

---

[181] 両写本ではA‘shārとなっているが（M: 7b; C: 10b）、刊本ではĀsharと直されている。ここでは刊本に従った。

[182] 両写本および刊本ではShāriḥとなっているが（M: 7b; C: 10b）、ここでは既出のセラハSāriḥと同一人物だと解釈した。

[183] 以上のモーセが出エジプトにあたりヨセフの遺体を探して見つけ出す話は『クルアーン』には無く、『旧約聖書』でもヨセフの骨を運び出したことが簡潔に記されているのみである（『旧約聖書』「出エジプト記」13章19節）。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』には同様の伝承が収録されているが、無名の老女である点と4枚の金の板が登場しない点でヤアクービーの記述とは異なる（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, pp. 482–483, 486）。

[184] タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では「62万人の20歳以上60歳未満の戦える男たち」と記されている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, p. 479）。

[185] タバリー『諸預言者と諸王の歴史』ではファラオの軍勢の馬はすべて雄であり、ジブリールの乗る雌馬の匂いにつられて全馬が海へと殺到したと述べられている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk,* serie 1, pp. 480–481）。

[186] 『クルアーン』5章26節。

[187] この箇所でモーセが何に対して怒ったのかはヤアクービーのテクストからは明らかではない。あるいは『旧約聖書』「出エジプト記」17章5–6節において、神がモーセに杖を持って岩のところへ行って打つように言っていることを踏まえて、「怒ったghaḍaba」ではなく、「杖を持ってbi-‘aṣā」と解釈することができるかもしれない。

[188] 『クルアーン』2章60節。また7章160節には動詞違い（「流れ出たinbajasat」）の章句がある。

そして神はモーセに対し、その地に会見の幕屋qubbat al-zamān[189]を建て、その内部に聖所al-haykalを作り、その聖所の中に聖櫃tābūt al-sakīna[190]を設置し、アロンがその聖所の祭司kāhin[191]となり、彼以外は誰もそこに入らないよう命じた。まずモーセはイスラエルの民の女たちの糸[192]を集め、（それで布が）織られた。また、すべての装飾品al-ḥilāを集めた。そして彼は100ズィラーウの長さの天幕を作り、その奥を聖所とし、その聖所の奥に聖櫃を置いた。この作業は、モーセの出エジプトから2年目に行われた。聖所の中に金の卓を置き、幕屋には金の鐘[193]を設置した。幕屋を宝石al-jawharで飾り、その中には（香の）煙を焚くための金の火鉢と、宝石で飾られた金のランプ台manāraを置いた。そしてアロンだけが幕屋に入って神の栄光を称え、モーセは（幕屋の）帳[194]の外に、残りのイスラエルの民は天幕の中にいた[195]。雲が幕屋を覆って、去ることはなかった。神は彼らに対して捧げものをするよう命じた。神はモーセに言った。「イスラエルの民に言いなさい。牛や羊の中で瑕疵のないものを捧げものとするように。祭壇al-midhbaḥに捧げものの脂肪を置くように。そして血も同様に祭壇にふりかけるように[196]。捧げものについては、特にアロンの子孫だけが許され、彼ら以外の者には禁じられる。彼らの内で罪を犯した者は、牛ないし羊、あるいは2羽の

---

189 この語については、英訳の注釈において以下のように説明されている。ヘブライ語のōhel mōʻēdすなわち「集会の幕屋」の訳語である。mōʻēdはその時間と場所のどちらも指すことが可能であるが、この語がシリア語聖書においてはmashkan zabnāと訳されており、その直訳は「時の幕屋」となる。アラビア語のqubbat al-zamānはこのシリア語訳をアラビア語に訳したものか（E: 292, n.126）。

190 アラビア語のsakīnaの語根SKNは「休止する、休息する、住む」といった意であるが、この語はヘブライ語のsh^{e}khīnāに由来しており、sh^{e}khīnāは『旧約聖書』「出エジプト記」40章34節で会見の幕屋内の宿り場を満たしたヤハウェの栄光kābōdに相当する語だとも言われる（E: 291, n. 128; T. Fahd, “Sakīna,” *EI*^{2}）。『クルアーン』でsakīnaの語は一般的な意味で用いられている場合もあるが、この場面に関連する2章248節では櫃tābūtの中にある神からの「静謐sakīna」とされている（R. Firestone, “Shekhinah,” *EQ*）。以上から、ヤアクービー『歴史』のこの場面におけるsakīnaとは、神から人間に下された恩寵の一種だと解釈した。

191 アラビア語では通常、イスラーム以前のアラビア半島で神がかりの予言などを行なった巫者のことを指すが、ここでは明らかにヘブライ語のkōhēnに対応する語句として用いられている。マスウーディー『黄金の牧場』においても「アロンが祭司kāhinになった」としている（al-Masʻūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 54）。

192 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では ʻuzūl となっているが（C: 10b）、刊本では ghuzūl と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、ghuzūl とあり（M: 7b）、校訂者の校訂が正しかったことが確認された。

193 「金の鐘」については『旧約聖書』中にそれと対応するような記述は見当たらない。

194 両写本ではal-sayrとなっているが（M: 7b; C: 10b）、刊本ではal-sitrと直されている。ここでは刊本に従った。

195 天幕とは会見の幕屋の外側にあったものを指す。これらの配置については岩波旧約聖書付録の図も参照されたい（『旧約聖書Ⅰ律法』「付録：図9　幕屋と中庭」p. 44）。

196 以上の犠牲について『旧約聖書』「出エジプト記」29章では祭司の任職式にともなう供儀として以下のように述べられている。完全な雄牛1頭と雄羊2匹を用意し（1節）、その内の雄牛を浄罪の供儀とし（10–14節）、雄羊1匹を全焼の供儀とし（15–18節）、もう一匹の雄羊を任職の供儀とする（19–26節）。また『旧約聖書』「レビ記」1章では全焼の供儀の細則について述べられており、牛の場合（1–9節）も羊の場合（10–13節）も全焼の供儀とする際には雄でかつ完全なものでなければならないとされている。

雉鳩[197]ないしは[198]2羽の仔鳩の中で手に入るものを神への捧げものとして祭壇に捧げるように」と。

［36］神はモーセに、10の節āyātを2枚のエメラルドの板[199]に記すよう啓示を下した。そこで彼は神の命にしたがってそれを書いた。その10の節は以下の通りである。「私こそがお前を隷属し僕（しもべ）となっていた家の地から出した主である。お前には私以外の神ilāhはない。天の上から地の下に至るまで、私の似姿を描いてはならないし、私に似せた[200]偶像を造ってはならない。そうしたものに礼拝してはならないし、敬うこともならない。というのも、主にして圧倒する王である私こそが、父たちの負債をその子らに清算させるものであり、私を忌む者に対しては三代四代にわたって報復するもの[201]であるが、私を[202]愛し私の教えを[203]守る者たちの中から、私を愛する者、私の教えを守る者に対してはそれが幾千の世代でも[204]恩恵を与える[205]ものだからである[206]。嘘をついて主の名にかけた誓いをしてはならない。というのも、神はその名にかけて嘘の誓いをした者を浄めることはないからである[207]。安息日を覚えておきなさい。お前がその日を清浄なものとするためである[208]。6日

---

[197] 両写本ではSHQBTYNとなっているが（M: 7b; C: 10b）、刊本ではshifnīnaynと直されている。ここでは刊本に従った。

[198] 両写本ではwaとなっているが（M: 7b; C: 10b）、刊本ではawと直されている。ここでは、『旧約聖書』「レビ記」5章7節の記述に鑑み、刊本に従った。

[199] 『旧約聖書』「出エジプト記」31章18節、32章15–16節などでは単に石板と記されている。なお、『クルアーン』7章150、154節でも単に複数形の「板alwāḥ」が用いられている。マスウーディー『黄金の牧場』は、モーセの事跡についてはかなり簡略にしか記していないが、この「板」については、「神が、シナイ山で彼の預言者であるアムラムの子モーセに下した板alwāḥは、エメラルドからできており、そこにある文字は黄金で書かれていた」としている（al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 54）。

[200] 両写本ではmushabbahとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではmushabbah^{an}と直されている。ここでは刊本に従った。

[201] 両写本ではni‘amīとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではniqamīと直されている。ここでは刊本に従った。

[202] 両写本ではilāとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではlīと直されている。ここでは刊本に従った。

[203] 両写本ではli-waṣātīとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではli-waṣīyatīと直されている。ここでは刊本に従った。

[204] 両写本ではulūf al-aslāfとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではulūf al-ālāfと直されている。ここでは両写本に従った。『旧約聖書』「出エジプト記」20章6節では、alāfīmという語が使われており、これは「千」の複数形であるが、「いくつもの氏族」とも「千代の人々」とも訳すことができるという（『旧約聖書Ⅰ律法』「出エジプト記」p. 211, n. 16）。なお、サアディヤ・ガオンのモーセ五書の翻訳では直訳でālāfと千の複数形になっている（Sa‘adiyā Ghā’ūn b. Yūsuf al-Fayyūmī, *al-Tawrāt*: *al-Tafsīr al-Aṣlī min Ma‘ālī al-Ḥākhām Sa‘adiyā Ghā’ūn b. Yūsuf al-Fayyūmī*, Jerusalem: ［Project Saadia Gaon］, 2015, p. 179）。

[205] 両写本ではamna‘となっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではaṣna‘と直されている。ここでは刊本に従った。

[206] この一文の直後は、両写本では「第三thālitha」となっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本では削除されている。ここでは刊本に従ったが、英訳ではこの語が訳文に反映されている（E: 294）。

[207] 『旧約聖書』「出エジプト記」20章7節では、神の名をみだりに唱えることを禁じる文言となっている。それが、ここでは神の名にかけて嘘の誓いをすることの禁止となっている。これはユダヤ教における神の名を唱えることへの忌避がイスラームにはないことによる書き換えと考えられる。

[208] 両写本ではli-taṭhīr^{i}-hiとなっているが（M: 7b; C: 11a）、刊本ではli-tuṭahhiru-huと直されている。ここでは刊本に従った。

間仕事をして、お前の仕事のすべてをするようにしなさい。7日目は主であるお前の神ilāhの安息の日である。お前自身、［お前の息子、］[209]お前の娘、お前の男奴隷、お前の女奴隷、お前の家畜、お前の獣（けもの）、そしてお前の集落に住まわせている者たちも、その日は[210]何も仕事をしてはならない。というのも、神は6日間で天と地と星々、そして天の高みにあるものすべてを創り、かくして神は7日目を祝福して[211]清めたからである。お前の父と母を敬いなさい。というのも、主であるお前の神ilāhがお前に与えた地上での日々が長くなる[212]からである。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。お前の仲間について嘘の証言をしてはならない。お前の仲間の家や妻、そして男奴隷や女奴隷、牛、驢馬などのいかなる財産もむやみに欲してはならない[213]」。

モーセはシナイ山Ṭūr Saynāに登り、40日間留まった。［37］そして律法al-Tawrā[214]を記した。その間イスラエルの民は彼（の戻り）を遅いと思った。彼らはアロンに「モーセはどこかに行ってしまった。彼はもう戻ってこないだろう」と言った。そして彼らは彼らの女性たちの装飾品に目をつけ‘amadū、それで穴の空いた仔牛を作った。それは風が入ると、中で牛の鳴き声がするのだった。そこで神はモーセに言った。「イスラエルの民は仔牛を作り、私ではなくそれを崇拝してしまった。彼らを滅ぼすようにと私に祈願しなさい」と。しかしモーセは彼らのために祈って、言った。「主よ、彼らの中にアブラハム、イサク、ヤコブがいたことを思い出されよ。彼らの不幸でエジプトの民を喜ばせないでください」と。モーセは40日ののち山から降りた。そしてその仔牛を見、彼らがそれに対して夢中になっているさまを見ると、彼の怒りは激しくなり、板alwāḥを投げ[215]、砕いて

---

[209] 両写本にはwa-ibn^{u}-kaはないが（M: 8a; C: 11a）、刊本では補われている。ここでは、『旧約聖書』「出エジプト記」20章10節の記述に鑑み、刊本に従った。

[210] マンチェスター写本ではfī-hāとなっているが、ケンブリッジ写本ではfī-hiとなっており（M: 8a; C: 11a）、刊本では後者に従いfī-hiと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[211] 両写本ではbarakaとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではbārakaと直されている。ここでは刊本に従った。

[212] 両写本ではtaṭulとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではtaṭūlと直されている。ここでは刊本に従った。

[213] 両写本ではtashtahīとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではtashtahiと直されている。ここでは刊本に従った。

[214] 一般に「律法」はユダヤ教の聖書（旧約聖書）の「モーセ五書」（トーラー）を指すが、イスラームにおいてタウラーal-Tawrāの語は『旧約聖書』全体を指す。『クルアーン』においてタウラーはしばしばインジールInjīl「福音書」とともに言及され、前者はユダヤ教徒の啓典（旧約聖書）、後者はキリスト教徒の啓典（新約聖書）を指している（『クルアーン』3章3、48、65節、5章46、66、68、110節など）。モーセが神から授けられた律法（モーセ五書）を指す場合、『クルアーン』ではキターブal-Kitāb「啓典、書」の語が用いられている（『クルアーン』2章53節、7章145節、11章110節、17章2節、23章49節など）（小田淑子「トーラー」『岩波イスラーム辞典』；H. Lazarus-Yafeh, “Tawrāt,” *EI*^{2}; C. P. Adang, “Torah,” *EQ*）。しかし、ヤアクービー『歴史』のこの場面では明らかに律法（モーセ五書）を指していると判断し、「律法」と訳出した。

[215] この「板alwāḥ」は『旧約聖書』「出エジプト記」32章15–19節の記述などから十戒を記した板であると考えられる。『旧約聖書』ではこの後再びモーセがシナイ山に登り、再度十戒を石板に書き記すのであるが、ヤアクービー『歴史』のテクストではその逸話は語られない。

しまった。モーセは兄弟であるアロンの頭を掴んだ[216]。そして彼は鳴き声を発する仔牛を見ると、それを壊し、土のようになるまで叩いて粉々にし、それを水に撒き散らした。彼はレビの一族[217]に言った。「剣を抜け。そして、あなたたちができるかぎり、仔牛を崇拝した者たちを殺せ」と。それでレビの一族は剣を抜き、1時間のうちに多くの人を殺した。神は彼らに言った。「私以外の神ilāhを作った者を滅ぼせ」と。

神はモーセにイスラエルの民の数を数え、それぞれの支族に有徳で優れた男を（長として）置くように命じた。20歳に達し[218]、また60を超えておらず、武器を帯びることのできる者の数は、603,550人であった。モーセがこれを数えたのは、エジプトを脱して2年後のことであった。ユダの支族[219]の長はアミナダブ‘Ammīnadāb[220]の子ナフションNaḥshūnであり、彼の支族で彼とともにいる者の数は74,600人であった。イッサカル[221]の支族の長はツアルṢū‘arの子ネタンエルNithanyilであり、彼とともにいる者の数は54,400人であった。ゼブルン[222]の支族の長は［38］ヘロンḤīlūnの子エリアブIlyābであり、彼とともにいる者の数は57,400人であった。ルベンの支族の子らの長はシェデウルShidī’ūr[223]の子エリツルIlīṣūr[224]であり、彼とともにいる者の数は47,500人であった。シメオンの支族の長[225]はツリシャダイṢūrīshadhdhāyの子シェルミエルShilūmiyālであり、彼とともにいる者の数は59,300人[226]であった。ガドの支族の長はデウエルDi‘wāl[227]の子エルヤサフIlyasafであり、

[216] モーセがアロンの頭をつかんだことについては『旧約聖書』には対応する記述はない（『旧約聖書』「出エジプト記」32章20節には「彼は、人々が作った若い雄牛を取って、火で焼き、粉々になるまで粉砕し」という記述がある）。一方、『クルアーン』7章150節には、「そして、書板を投げ、兄弟の頭を掴んで自分に引き寄せた」という記述、また20章94節でも同様の出来事の記述の中にアロンの言葉として「私の母の息子よ、私の髭や頭を掴むのをやめよ」という記述がある。ヤアクービー『歴史』の記述もこれらを援用したものか。なお、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』も同様の記述を伝えるが、そこでは『クルアーン』2章、7章、20章の異なる章の文言が組み合わされた上で、この事件を引き起こした元凶としてサマリア人al-Sāmirīの存在があったことが語られている（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 490–492）。

[217] 両写本ではli-banī Isrā’īl Lāwīとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではli-banī Lāwīと直されている。ここでは刊本に従った。

[218] 両写本ではbalagha banī al-‘ishrīn sanaとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではbalagha al-‘ishrīn sanaと直されている。ここでは刊本に従った。

[219] 以下の「支族」とした個所は、ヤアクービーのテキストではbanīとsibṭが混在・併用されているが、訳出にあたって「支族」という訳語に統一した。

[220] 両写本では‘Ammīnadātとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本では‘Ammīnadhābと直されている。ここでは刊本に従った。

[221] 初出の際にはIshājarという字形だったが、ここではYishājarという形になっている。

[222] 初出の際にはZifūlūnという字形だったが、ここではZiblūnという形になっている。

[223] 両写本ではSdāWRとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではShidī’ūrと直されている。ここでは刊本に従った。

[224] 両写本ではALNṢWRとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではIlīṣūrと直されている。ここでは刊本に従った。

[225] テキストではこれ以前の「長」の原語はra’īs、これ以降の「長」はra’sとなっている。

[226] 両写本では最初の2桁がkhamsa wa tis‘ūnとなっているが（M: 8a; C: 11a）、刊本ではtis‘a wa khamsūnと直されている。ここでは、『旧約聖書』「民数記」1章23節の記述に鑑み、刊本に従った。

[227] 両写本ではRi‘wālとなっているが（M: 8a; C: 11b）、刊本ではDi‘wālと直されている。ここでは刊本に従った。ただし、『旧約聖書』「民数記」1章14節ではデウエルと記されるが、2章14節ではレウエルと記されているなど、この人物の人名については『旧約聖書』の各箇所、また様々な言語への翻訳においても一定せず、混乱が見られる。

彼とともにいる者の数は45,650人であった。エフライムの支族の長はアミフド‘Ammīhūdhの子エリシャマIlīshama‘であり、彼とともにいる者の数は40,500人であった。マナセの支族の長はペダツルFidāṣūrの子ガムリエルJamliyālであり、彼とともにいる者の数は32,200人であった。ベニヤミンの支族の長はギドオニJidh‘ūnīの子アビダンAbīdhānであり、彼とともにいる者の数は65,400人であった。ダンの支族の長はアミシャッダイ‘Ammīshāddāyの子アヒエゼルAkhī‘āzir[228]であり、彼とともにいる者の数は32,700人であった。アシェルの支族の長はオクラン‘Ukhranの子パグイエルFaj‘īyāl[229]であり、彼とともにいる者の数は41,500人であった。ナフタリの支族の長はエナン‘Īnānの子アヒラAkhīra‘であり、彼とともにいる者の数は53,400人であった。レビの一族は会見の幕屋に仕える者となり、それを守った。そのため、レビ人は彼らに加えられなかったfa-lam yadkhulū ma‘a-hum[230]。彼らは気高いことkarāma、聖なることquds、会見の幕屋への奉仕、浄めることにおいて特別なものたちであった。以上が、律法の第四の書[231]の記述に基づく、イスラエルの民の数と、彼らのそれぞれの支族の長の名前と、その長とともにいた支族（の数）である。

［39］神はモーセに「イスラエルの民の諸支族の長たちに、彼らのうちの主立った者みなが捧げものをするように言いなさい」と命じた[232]。彼らのうちのそれぞれの者の捧げものは以下のようなものであった。130ミスカール[233]の銀の器、70ミスカールの銀の濾し器miṣfā[234]。銀の器の内容物は、油と混ぜた小麦粉[235]であった。そして香で満たされた10ミスカールの金の香皿midhan。雄牛1頭、雄羊1頭、1歳の子羊1頭、1歳の雄山羊1頭、それらは全焼の供儀al-dhabaḥ al-kāmilである[236]。そ

---

[228] 両写本では’Wḥā‘āZRとなっているが（M: 8a; C: 11b）、刊本ではAkhī‘āzirと直されている。ここでは刊本に従った。

[229] 両写本ではنحعيالとなっているが（M: 8a; C: 11b）、刊本ではFaj‘īyālと直されている。ここでは刊本に従った。

[230] 『旧約聖書』「民数記」1章47節に「ただし、彼らの中にあってレビ人たちだけは、自分たちの父祖の部族に従って登録されはしなかった」とあることから、このように訳したが、「人々はレビの子孫といっしょに（会見の幕屋に）入ることはなかった」という解釈も成り立ちうる。

[231] 『旧約聖書』「民数記」を指す。

[232] 以下は『旧約聖書』「民数記」7章から続く犠牲に関する諸規定を部分的に抜き出して記したものと考えられる。

[233] 重さを表す単位。『旧約聖書』では「シェケル」。ただしシェケルは11.424g（A. Strobel+柴田美々子「度量衡」『旧約新約聖書大事典』）、ミスカールは概ね4.46g（佐藤次高「度量衡」『新イスラム事典』）であり大きく異なる。なお、サアディヤ・ガオンのモーセ五書の翻訳でもミスカールと訳されているが、さらにそれに続けて「エルサレムのミスカールでbi-mithqāl al-Qudus」と説明されている（Sa‘adiyā Ghā’ūn, *al-Tawrāt,* p. 341）。

[234] 両写本ではMṢFYとなっているが（M: 8a; C: 11b）、刊本ではmiṣfāと直されている。ここでは刊本に従った。英訳の注釈では、アラビア語のmiṣfāは「濾し器」という意味であり、ヘブライ語原文はmizrāq「鉢」となっているが、これはシリア語で両者の意味を持つshāḥlāを訳したため齟齬が生じたと推定している（E: 296, n. 141）。

[235] マンチェスター写本ではsamīdとなっているが、ケンブリッジ写本ではshamīdとなっており（M: 8a; C: 11b）、刊本では後者に従いshamīdと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。なお、サアディヤ・ガオンのモーセ五書の翻訳においてもsamīdとされている（Sa‘adiyā Ghā’ūn, *al-Tawrāt,* p. 341）。

[236] 『旧約聖書』「民数記」7章以下では動物については、全焼の供儀、浄罪の供儀、和解の犠牲に分けて記述があり、このal-dhabaḥ al-kāmilとは全焼の供儀のことを指すと考えられる。ヤアクービーのテクストには、浄罪の供儀の犠牲については記述がなく、その後に和解の犠牲の動物の記述があるが、「和解の犠牲」に相当するような術語は見当たらない。

して、雄牛２頭、雄羊５頭、若い雄山羊５頭、１歳の子羊５頭であった。神はモーセにイスラエルの民に以下のように言うように命じた。なんの瑕疵もなく非の打ち所がない黄色い雌牛を屠殺し[237]、その血を採って、会見の幕屋の綱ḥibālにふりかけ、その牛を皮とともに焼くべきこと。その後で、（屠殺した者とは）別のものを来させて、灰を集めさせ、それを別の場所へと持っていかせるべきこと。もし誰かが清められることを望むのであれば、その灰の（混ざった）水の中にその身を置くべきこと。そうすればそれは清めとなること[238]。

モーセとイスラエルの民は長年荒野に留まった。彼らの食べ物はマーンmann[239]であった[240]。マーンはコリアンダーkusburaの種のようなもので、彼らはそれを石臼で挽き、それをパンにするのである。彼らの食べ物は何よりも素晴らしいものとなった。それは彼らのもとに夜に降ってきて、彼らはそれを昼に集めていた。しかし彼らは泣き叫び、「誰が私たちに肉を食べさせてくれるのか。私たちがエジプトで食べていた大きな魚nūnやキュウリ、メロンbiṭṭīkh、ニラkarrāth[241]、タマネギ、ニンニクfūmをあなたたちは憶えていないのか」と言い始めた。それでモーセの憂いは強くなった。さらに彼らは「私たちに肉を食べさせてくれ」と言い始めた。それでモーセは言った。「神よ、まことに私はイスラエルの民を抑え切れません」と。そこで神はモーセに啓示を下した。「まことに私はお前たちに肉を与えるものである」と。それで神は彼らにウズラを送った。そして神は、モーセが彼らをシリアへと送り出すよう、彼らに示した。それでモーセは、ヌンの子ヨシュア［たち］[242]をその地の情報をもたらすよう、シリア、カナンの一族の地に送った[243]。イスラエルの民は言った。

---

[237] 両写本ではtadhbaḥūとなっているが（M: 8b; C: 11b）、刊本ではyadhbaḥūと直されている。ここでは刊本に従った。

[238] 神の命じたというこの一段は、『旧約聖書』「民数記」19章1–10節にある赤い雌牛と浄めの儀礼に基づくものと考えられる。英訳の注釈によると、雌牛の色が赤から黄色に変わっているのは、『クルアーン』2章69節の「黄色い雌牛baqara ṣufarā’」という記述によるものだという（E: 296, n. 142）。

[239] 一般に「マナ」と呼称されるが、これはギリシャ語での読み由来するという。ここではヘブライ語表記mānに準じた音写とした（J. Feliks+南部泰孝「マナ」『旧約新約聖書大事典』）。

[240] 以下のマーンに関するくだりは、『旧約聖書』「出エジプト記」16章1–36節、「民数記」11章1–30節に記述があるが、ここでは「民数記」11章4–9節の記述が用いられていると考えられる。

[241] ヘブライ語ではḥāṣīr。日本のニラとは似ているものの、別種である。おそらくは、地中海沿岸原産で、エジプト・パレスチナに野生し、また栽培されたポロネギAllium Porrumのことであろうとされる（J. Felix+山我哲雄「ニラ」『旧約新約聖書大事典』）。

[242] 両写本にはwa-ghayr^{i}-hiはないが（M: 8a; C: 11b）、刊本では補われている。ここでは、『旧約聖書』「民数記」13章にあるモーセが複数のスパイを送り込んだという記述、およびそれに続く従属節の動詞が三人称複数になっていることから、刊本に従った。

[243] 原文はfa-ba‘atha Mūsā ilā al-Sha’m bi-Yūsh‘ b. Nūn［wa-ghayr-hu］ilā arḍ banī Kan‘ān. 目的地となる場所が、「シリア」と「カナンの一族の地」と二度に分かれて登場しており、この二つの場所の関係性は判然としない。「カナンの一族の地」は一般にヨルダン川西岸の山地を指し、この後モーセがヨシュアに対して「あなたはイスラエルの民とともに、神が彼らに遺したカナンの一族の地に入ることになる」（L: I, 41）と言っていることからも、そのような意味で使われていることは明らかであろう。一方でアラビア語の「シリアal-Sha’m」の指し示す範囲は、通常いわゆる「歴史的シリア」であるが、これ以前に現れた「聖なる地に属するシリアal-Sha’m min al-arḍ al-muqaddasa」という用法（L: I, 15;「『歴史』訳注（1）」p. 149）、および、本稿p. 138（L: I, 34）の「聖なる地」の用法を踏まえるとパレスチナを指すと考えられ、同一の場所の言い換えと解釈することもできる。

[40]「私たちには巨人たちと戦う力はない」と。神はモーセにミディアンの人々に復讐することを許した[244]。そこでモーセはイスラエルの民から12,000人を派遣した。彼らはミディアンの人々を皆殺しにし、彼らの王たち、すなわちエビAwī[245]、レケムRiqim[246]、ツルṢūr、フルḤūr、レバRiba‘の5人の王を殺した。戦いの中でベオルBa‘ūr[247]の子バラムBal‘ām[248]が殺された。彼は預言者nabīであり[249]、イスラエルの民の軍に女性たちを送り出し、彼らを堕落させてしまうよう、ミディアンの王に促した者であった。モーセはそれに怒った。それで神はモーセに、その戦利品をイスラエルの民の間で分け、彼らから50分の1[250]を取って、それを神のものとし、アロンの子孫たちに渡すよう命じた[251]。その後神は彼に、イスラエルの民をシリアへ派遣し、そこにいるものと戦うよう命じた。そこで彼は大軍を派遣したが、彼らは野営をしながら少しずつしか進まず、また「私たちは巨人たちを恐れる」と言っていた。彼らはセイルの山Jabal Sā‘īr[252]に留まった。神がモーセに言った。「イスラエルの民は私の命に反いた。だから彼らは対価を支払って食べ物を買い、イスラエルの民に服

---

[244] ミディアンの民への復讐については『旧約聖書』「民数記」25章1–19節に記述がある。その記述はやや混乱しているが、25章17–18節においては、ヤハウェがモーセに、ミディアン人による陰謀を理由に彼らを攻撃することを命じている。彼らとの戦いの記述は「民数記」31章1–12節にあり、もともとは直接25章から続いていたとも考えられている。31章2節では、「ミディアン人に対して、イスラエルの子らの復讐を果たしなさい」とヤハウェがモーセに告げている。ヤアクービーのテクストにおいては、シリアへの進攻をイスラエルの民がためらっている記述の直後に現れるが、『旧約聖書』ではこの二つの出来事の間に直接的な因果関係はない。

[245] 両写本ではŪnīとなっているが（M: 8b; C: 11b）、刊本ではAwīと直されている。ここでは刊本に従ったが、弁別点の上下のみの違いとなるŪbīの書写間違いの可能性もある。

[246] 両写本ではرقمنとなっているが（M: 8b; C: 11b）、刊本ではRiqimと直されている。ここでは刊本で従った。

[247] 両写本ではBa‘ūrになっているが（M: 8b; C: 11b）、刊本ではBā‘ūrと直されている。ここでは両写本に従った。

[248] ペトル出身の異教の預言者。『旧約聖書』では、古代オリエントにおける「見者」の特徴を持つものとして描かれている（L. M. Pákozdy + 月本昭男「バラム」『新約旧約聖書大辞典』）。

[249] nabīは、ヘブライ語のnābīと同様に、神からの言葉を聞き、それを人々に伝える者を言う。ここでバラムが預言者と呼ばれているのは、『旧約聖書』「民数記」22–24章において、イスラエルの民に直面したモアブ人の王バラクが、バラムを招聘してイスラエルの人々を呪わせようとした際に、ヤハウェがバラムの口を通じて託宣を下したことを受けてのことであろう。ただし、バラムはこの箇所ではヤハウェに従う者として描かれるが、『旧約聖書』「民数記」31章8, 16節、「申命記」23章5–6節などではイスラエルに対して策略を仕掛ける者として描かれるという違いがある。

　イスラームの伝承においては、『クルアーン』7章175節において「彼らに語れ、われらがわれらの諸々の徴を授けたが、それを脱ぎ捨て、悪魔が付きまとい、迷える者たち（の一人）となった者の消息を」として言及される人物がバラムであるともされる（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 511）。また、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』が採録する伝承では、「ベオルの子神託者バラムBal‘am b. Ba‘ūr al-Ma‘rūfとして言及されている箇所もある（al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 508）。H. Schützinger, “Die arabische Bileam-Erzählung,” *Der Islam* 59-2（1982）, pp. 195–221も参照。

[250] 両写本ではwāḥid^an^となっているが（M: 8b; C: 11b）、刊本ではaḥad^an^と直されている。ここでは両写本に従った。

[251] 『旧約聖書』「民数記」31章47節に対応。

[252] セイルは死海の南方の地。「セイルの山」は『旧約聖書』「創世記」36章8節に言及され、また「民数記」24章18節で、バラムの託宣の中でも「セイルは所有地となる」として言及されている。ヤークートによると、タバリーヤとアッカーの間のナザレにある村とされ、『旧約聖書』al-tawrātの中に登場するという言及がある（Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 3, p. 171）。

従してきた者たちに今度は従うことになる」と。それはモーセがアモリ人[253]の王シホンSīḥūnを殺し、彼の土地を手に入れた後のことであった[254]。

荒野al-tīh、それはシナイの荒野barrīya Sīnāであったのだが、そこでの彼らの滞在が40年になった時、神はモーセに「まことに私はアロンを私のもとに召す。ゆえに、私の天使たちがやってきて彼の魂を取るために、彼を連れて山に登れ」と啓示を下した。そこで、モーセは彼の兄弟であるアロンの手を取った。モーセがアロンを連れて山に登った時[255]、アロンの子エルアザルIl'āzar[256]だけがアロンとともにいた。モーセが山に登ると、寝台があり[257]、その上に衣があった。そこでモーセはアロンに言った。「我が兄弟よ、神がお前のために用意した、この清められた衣を着なさい。それを着て神と出会うのだ」と。アロンはそれを着て、[41]寝台の上で体を伸ばし（て横になり）、そして死んだ[258]。モーセは彼のために神の祝福を祈ったṣallā 'alay-hi Mūsā[259]。イスラエルの民はアロンが見当たらなかったので、騒ぎ立てて「アロンはどこか」と言った。モーセは「神がその御許に彼を召したのだ」と言った。彼らは動揺した。というのもアロンは彼らの間で愛され、彼らに優しかったからだ。そこで神は彼らのためにアロンを寝台の上に乗せ、彼らがアロンの顔を見られるようにした。それで彼らはアロンが死んでしまったことを知った。その時アロンの年齢は123歳であった。彼には4人の子がおり、ナダブNādab、アビフAbīhū[260]、エルアザル、イタマルĪtamarであった。ナダブとアビフは彼の生前に死亡しており、エルアザルとイタマルは（彼が死んだ時も）生きていた。エルアザルがアロンの地位を継ぎ、会見の幕屋で神の栄光を称えた。

モーセはヌンの子ヨシュアを呼び、イスラエルの民の前で彼に言った。「行きなさい。そして、あなたの心を強くしなさい。まことに、あなたはイスラエルの民とともに、神が彼らに遺したカナンの一族の地に入ることになる。また、この律法については、聖櫃に仕えていたレビの一族の中の祭司たちに与えよ。彼らに神の居所maqāmを尊ばせ、律法の中であなたたちに明かされた神の指示を守らせよ」と。モーセは彼らに、律法にあるものに従うように指示し、彼らを祝福した。

---

[253] 両写本ではal-Mūrīとなっているが（M: 8b; C: 12a）、刊本ではal-Amūrīと直されている。ここでは刊本に従った。

[254] 『旧約聖書』「民数記」21章21–30節に対応。

[255] 『旧約聖書』「民数記」21章21–30節、33章38節では、この山はホル山とされる。ホル山はエドムの東の国境地帯にある山（K.H. Bernhardt＋木幡藤子「ホル」『旧約新約聖書大事典』）。

[256] 両写本ではIl'āzarとなっているが（M: 8b; C: 12a）、刊本ではIlīʿāzarと直されている。ここでは両写本に従った。以降のエルアザルの用例も同様に処理した。

[257] マンチェスター写本ではidhanとなっているが、ケンブリッジ写本ではidhとなっており（M: 8b; C: 12a）、刊本では後者に従いidhと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

[258] 『旧約聖書』「民数記」20章22–29節では、エルアザルがその衣服を着て戻ったと語られている。

[259] これはイスラームでの葬いにおいて、その主導的立場を務めることを表す常套句的表現である。

[260] 両写本ではAbīhūとなっているが（M: 8b; C: 12a）、刊本ではAlīhūと直されている。ここでは、『旧約聖書』「出エジプト記」6章23節、28章1節に登場する人名に鑑み、両写本に従った。以降のアビフの用例も同様に処理した。

神がイスラエルの民にモーセの舌を通じて指示したことには以下のようなことがある。モーセは彼らに言った[261]。

「あなたたちが神の前に立ったその日のことを憶えていなさい[262]。その時、神が私に言った。『この民を私の前に集めよ。私は私の言葉を彼らに聴かせよう。彼らが生きている間、私を恐れるように』と。そしてあなたたちはその山の麓に立った。その山は天の中程qalb al-samā'へと火を燃え上がらせている。神が私に火の中から語った。あなたたちはその声を聞いた。（神の）似姿al-shibhは見なかった。神はあなたたちに、あなたたちが十戒を学ぶことを指示し、私にはあなたたちに慣習al-sunanと定めal-qaḍā'を教えることを指示した。あなたたちは、あなたたちがそこに向かう[263]地において、それによって行動しなさい[264]。あなたたち自身をよく守りなさい。偶像を作ってはならない。男に似た像であっても女に似た像であっても。[42]地を這うものに似た像であっても、海に居るものに似た像であっても。あなたたちは天を見上げてはならない。星々を崇拝してしまうからである[265]。まことに神は、私が良き地al-arḍ al-ṣāliḥaへ入ることはないと約束された。そして私はこの地で死に、ヨルダン川al-Urdunnを越えることはないが、あなたたちは（それを）越え、神があなたたちの遺産mīrāthとした良き地に入るだろう。あなたたちの主である神があなたたちと取り決めた契約を見失ってはならない。偶像を作ってしまうからである[266]。もしあなたたちが良き地に入ったならば、あなたたちの神ilāhの前で悪の行いをなしてはならない[267]。あなたたちは反抗しようとして[268]滅び、諸集団の間に散り散りになってしまうからである。もしあなたたちが、人間の手で作った木や石を崇拝しても、それらが（あなたたちを）見ることはない。あなたたちが祈っても、あなたたちの祈りは聞かれることはない。まことに、あなたたちに慈愛あまねき神こそが、あなたたちの声を聞くのである。

まことに、あなたたちが聞いたように神の声を聞き、あなたたちが見たように神を見た者は、神に反抗することはふさわしくない。あなたたちはすでにエジプトの民に神がなしたことを見た。あなたたちは目の当たりにしていたはずだ。まことに神こそが主である。神は彼以外にはなく、あな

---

[261] 以下は『旧約聖書』「申命記」4章以下に続く、モーセが人々に語った言葉を部分的に採ったものであると考えられる。

[262] 『旧約聖書』「申命記」4章10節には「あなたがあなたの神ヤハウェの前に立った日、そのときホレブでヤハウェは私に言った」とあり、それに続く13節では「神はあなたたちにその契約を告知し、十戒を行うようにあなたたちに命じ、それを2枚の石の板に書いたのである」とあるため、これはシナイ山（ホレブ）において、モーセが神から十戒を受け取った時のことを指していると考えられる。

[263] 両写本ではنصربونとなっているが（M: 9a; C: 12a）、刊本ではtaṣīrūnaと直されている。ここでは刊本に従った。

[264] 両写本ではta'malūnaとなっているが（M: 9a; C: 12a）、刊本ではta'malūと直されている。ここでは刊本に従った。

[265] 両写本および刊本ではta'budūとなっているが（M: 9a; C: 12a）、ここではta'budūnaと解釈した。

[266] 両写本ではtaṣna'ūnaとなっているが（M: 9a; C: 12a）、刊本ではtaṣna'ūと直されている。ここでは両写本に従った。

[267] 両写本ではta'malūnaとなっているが（M: 9a; C: 12a）、刊本ではta'malūと直されている。ここでは刊本に従った。

[268] 両写本ではtūshikūnaとなっているが（M: 9a; C: 12a）、刊本ではtūshikūと直されている。ここでは両写本に従った。

たたちに［火を］[269]見させ、あなたたちにその声を聞かせた。また彼はあなたたちの父祖を愛したので、彼は彼らの後継者たちを選び、かつてあなたたちより偉大で強力であった民をあなたたちのために滅ぼしたのだ。まことに神はあなたたちを良き地へと入らせるだろう。そして、あなたたちのためにそれを嗣業（しぎょう）の地 mīrāth[270] とするだろう[271]。

神があなたたちに指示し、あなたたちに命じた慣習 sunan-hu を守りなさい。そうすれば、神があなたたちと、あなたたちの後に来る後継者たちに良いことがあるだろう。また、その地におけるあなたたちの寿命が増すだろう[272]。

神があなたたちに命じた神の指示を受け入れなさい。また、それから[273]右にも左にも逸れてはならない。あなたたちの主が指示したあらゆる道をゆきなさい[274]。そうすればあなたたちに良いことがあるだろう。

あなたたちの心を尽くし、またあなたたちの注意と関心[275]をもって、神を愛しなさい。それ[276]を、あなたたちの子供たちに語りなさい。そしてそれを実行しなさい。また、あなたたちの家において、それを朗唱しなさい。あなたたちの両目の間に印としてそれを置き、それをあなたたちの家に書きなさい[277]。まことに神はあなたたちに、［43］あなたたちが建てたのではない大きな町々と、あなたたちが満たした[278]のではない良いものに満ちた家々、あなたたちが掘ったのではない石で縁取

---

[269] 両写本には nār[a]-hu はないが（M: 9a; C: 12a）、刊本では補われている。ここでは、『旧約聖書』「申命記」4章36節にある「天からあなたにその声を聞かせ、地上では大いなる火をあなたに見させ、あなたは火の中からその言葉を聞いた」という記述に鑑み、刊本に従った。

[270] 嗣業を表すヘブライ語 naḥalā は元来「賜物」を意味する言葉であるが、古代イスラエルでは、他人に譲渡できないような生産手段の所有権を「ナハラー」と表現した。「ヨシュア記」によると、出エジプト後に約束の地、カナンの地に入ったイスラエルの民は、その地の先住民を制圧し、その地を部族ごと、氏族ごと、家族ごとにくじをもって分配したとされ、それが「嗣業の地」と呼ばれ、神が与えたものであるため、原則として売買してはならないものとされた（『旧約聖書 I 律法』「補注　用語解説：嗣業の地」p. 12）。

[271] 『旧約聖書』「申命記」4章38節に対応。

[272] 『旧約聖書』「申命記」4章40節に対応。

[273] 両写本では ʻan-hu となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本では ʻan-hā と直されている。ここでは刊本に従った。

[274] 『旧約聖書』「申命記」5章32–33節に対応。

[275] 両写本では bāl-kum となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本では māl-kum と直されている。ここでは両写本に従った。英訳でも同様の解釈が採用されている（E: 299, n. 152）。

[276] 両写本および刊本では qaṣṣū-hunna となっているが（M: 9a; C: 12b）、hunna が指し示す女性複数が見当たらない。後段とあわせて考えるならば、これは hā であり、「神の指示」を意味すると考えられるか。

[277] 『旧約聖書』「申命記」6章8–9節には、「あなたはそれらをあなたの手に結んで徴とし、あなたの額に下げて覚えとなし、あなたの家の柱と町の門のところにそれらを書き記しておきなさい」とある。これは、それぞれシェマ（ユダヤ教徒が朝夕に唱える主要な祈りの言葉）を書き付けた羊皮紙を小さな箱に納め、左腕と額のそれぞれ2箇所に巻きつけていたこと、また、戸口の右側上部にあるくぼみにテクストを入れた箱を収納していたことの、2つのユダヤ教の伝統に基づく記述である。

[278] マンチェスター写本では本文中に lam ta‘murū-hā とあり、欄外で lam tamla’ū-hā と訂正されている一方、ケンブリッジ写本では本文中に lam tamla’ū-hā とあり、欄外で lam ta‘murū-hā と訂正されている（M: 9a; C: 12b）。刊本では lam tamla’ū-hā となっている。ここでは刊本に従った。

られた井戸、あなたたちが植えたのではないブドウとオリーブを与えるだろう。神を忘れてはならない。彼を畏れなさい。彼を崇拝しなさい。彼の名において誓いなさい。他の神ilāhに従ってはならない。大地の表面からあなたたちを滅ぼし去る神の怒りに注意せよ[279]。神を欺いてはならない。彼の命令を受け入れ、良いことと正しいことをしなさい[280]。

あなたたちがファラオの奴隷だった時、神が強い手と強大な奇跡の徴によってあなたたちを導き出したこと、そしてそれがファラオとその配下の者たちを死に追いやったことを思い出しなさい。あなたたちは目の当たりにしていたはずだ。

まことに神はあなたたちに以下のように言っている『私はお前たちに良き地を与えるだろう[281]。そして私は、お前たちが対峙している諸民族に対して、お前たちを上位に立たせるだろう。お前たちをヘト人たちal-Ḥittīyīn[282]、ギルガシ人たちal-Jarashīyīn[283]、アモリ人たちal-Amūrīyīn[284]、カナン人たちal-Kan‘ānīyīn、ペリジ人たちal-Farāzīyīn[285]、ヒビ人たちal-Ḥawīyīn[286]、イェブス人たちal-Yibūsīyīn[287]に勝利させるだろう。これらの七つは、お前たちより数が多く、強力な民族ではあるのだが』と[288]。神があなたたちを彼らに勝利させたなら[289]、彼らを打ち、石を投げよ。彼らに慈悲をかけてはならない。彼らと契約してはならない。あなたたちの娘たちを彼らに嫁がせてはならない。それは、彼らがあなたたちにとって躓き[290]にならないようにである。『彼らはお前たちの子供たちを私から逸脱させ、その子供たちは私以外の神ilāhを崇拝するようになるだろう。そして、お前たちに対する私の怒りは強くなり、私はお前たちをただちに滅ぼしさることになるだろう。そうならないように、彼らの偶像を破壊し、彼らの祭壇を損ない、彼らの捧げものを壊し、それらを燃や

---

279 『旧約聖書』「申命記」6章1–15節に対応。

280 『旧約聖書』「申命記」6章16–18節に対応。

281 『旧約聖書』「申命記」6章20–23節に対応。

282 両写本および刊本では「巨人たちal-jabbārīn」となっているが（M: 9a; C: 12b）、ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、al-Ḥittīyīnと解釈した。

283 両写本では「ホラーサーン人たちal-Khurāsānīyīn」となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではal-Jarashīyīnと直されている。ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、刊本に従った。

284 両写本では「ヨルダン人たちal-Urdunnīyīn」となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではal-Amūrīyīnと直されている。ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、刊本に従った。

285 両写本ではالعواريسن となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではal-Farāzīyīnと直されている。ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、刊本に従った。

286 両写本では「ハッラーン人たちal-Ḥarrānīyīn」となっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではal-Ḥawīyīnと直されている。ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、刊本に従った。

287 両写本および刊本では「ナーブルス人たちal-Nābulusīyīn」となっているが（M: 9a; C: 12b）、ここでは、『旧約聖書』「申命記」7章1節の記述に鑑み、al-Yibūsīyīnと解釈した。

288 これらの言葉は、『旧約聖書』「申命記」7章1節では神の一人称で語られておらず、モーセの語りとなっている。

289 マンチェスター写本ではfa-idhāとなっているが、ケンブリッジ写本ではfa-idhとなっており（M: 9a; C: 12b）、刊本では後者に従いfa-idhと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

290 マンチェスター写本では‘TRHと、ケンブリッジ写本では‘BRHとなっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本では‘athraと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

せ[291]。まことにお前たちが私の指示を聞き、私の裁定に従ってことをなしたならば、私はお前たちのためにお前たちへの恩恵と、私がお前たちの父祖と取り決めた契約を守るだろう。そして、お前たちの数を増やし、お前たちの農地と家畜を豊かにする』[292]。

神のために、あなたたちの財産から取り置いておくように。そこから孤児、寡婦、困窮者と弱者、またあなたたちとともに住んでいるが農地のない者[293]に分け与えよ[294]。

あなたたちが二者の間を裁定する時は公正に行い、賄賂を取ってはならない。というのも［44］賄賂は裁定者の目を曇らせてしまうからである[295]。祭壇のそばに木を植えてはならない[296]。雄牛であれ雄羊であれ瑕疵のある捧げものをしてはならない[297]。神以外に崇拝される偶像を作る者は殺しなさい。何者かが太陽や月、星々、あるいは光からできたものを拝んでいることがあなたたちに知らされたなら、その者について調べなさい[298]。そしてあなたたちはその情報が正しいとわかったなら、その者が死ぬまで石打ちにしなさい[299]。処刑の裁定に際しては、一人のみの[300]証言を採用してはならず[301]、二人もしくは三人の証人の証言を採用しなければならない[302]。証人たちが処刑を要する者について証言したならば、証人たちが姿をあらわし、処刑される者に彼らが手を下すようにしなさい[303]。あなたたちにとって裁定が困難な時は、祭司たちal-aḥbār wal-kuhhānに助言を求めなさい[304]。故意ではなく過失によって人を殺してしまった者については、その者が血の復讐を求める者walī

---

[291]『旧約聖書』「申命記」7章1–5節に対応。

[292]『旧約聖書』「申命記」7章12–13節に対応。『旧約聖書』該当箇所ではこれらの言葉はモーセの発言となっているが、ヤアクービー『歴史』のテクストでは明らかに「私」は神を指しているため、神の発言として訳出した。ただし、アラビア語文法的には明確な切れ目があるわけではなく、テクストに混乱が見られる。

[293]「あなたたちとともに住んでいるが農地のない者」は、ヘブライ語ではgērと呼ばれる寄留者を指すと思われる。この部分は『旧約聖書』「申命記」14章29節において言及される「寄留者、孤児、寡婦」を援用しているものと考えられる。

[294]『旧約聖書』「申命記」14章29節に対応。

[295]『旧約聖書』「申命記」16章19節に対応。

[296]『旧約聖書』「申命記」16章21節に対応。該当箇所には「あなたは、自分であなたの神ヤハウェの祭壇を築いて、その脇にアシェラ像やどのような木も据えてはならない」とある。アシェラはカナンの豊穣の女神であり、生命の象徴として常緑の聖木崇拝と結びついていた。人々は女神の象徴である樹木の陰で礼拝するのを喜びとしたと言われ、『旧約聖書』のいくつかの箇所でそれが厳しく批判されている（『旧約聖書Ⅰ律法』「補注用語解説：アシェラ」pp. 3–4）。

[297]『旧約聖書』「申命記」17章1節に対応。

[298]『旧約聖書』「申命記」17章3–4節に対応。該当箇所では「光からできたもの」に代わって「天の万象」とされる。

[299]『旧約聖書』「申命記」17章4–5節に対応。

[300] マンチェスター写本ではwāḥidと、ケンブリッジ写本ではwāḥidaとなっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではwāḥidと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[301] 両写本ではwa-lāとなっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本ではwa-lākinnaと直されている。ここでは刊本に従った。

[302]『旧約聖書』「申命記」17章6節、19章15節に対応。

[303]『旧約聖書』「申命記」17章7節に対応。

[304]『旧約聖書』「申命記」17章8–9節に対応。

al-damから逃れて、追いつかれないようにしなさい[305]。あなたたちは罪なき者の血を流してはならない[306]。罪なき者を故意に殺した者は誰であれ処刑するように。祭司あるいは[307]裁定者qāḍīのところで証言がなされない限り、あなたたちは何者も[308]殺してはならない。ある者が虚偽の証言をしたことに裁定者が気づいたならば、その証人が証言された者に対してなそうとしたこと[309]が、証人に対してなされる。すなわち、命には命、目には目、手には手、足には足である[310]。

あなたたちがある人々と戦おうとして、彼らの町に着いた時は、まず彼らに降伏を呼びかけなさい。もし彼らがあなたたちに応じたならば、彼らに税ḍarībaを課しなさい。もし彼らが降伏に応じなかったならば、あなたたちは武器を持つ者すべてを殺しなさい[311]。その町の木を切り倒してはならない[312]。

神はモーセに言った[313]。あなたがあなたの敵との戦いに出ていき、神があなたに彼らに勝る力を与え、捕虜の中のある女性を見て好きになり己のものにしたいと思った時は[314]、その女性をあなたの家に連れて行くがよい。彼女の頭部を露わにし[315]、爪を切り、捕えられた時に着ていた服を脱がし、あなたの家に3ヶ月間[316]留めて［45］父母のために泣くようにしなさい。かくして彼女を合法なものとしなさい。もしあなたが彼女に触れた後、彼女のことを気に入らなくなったならば、彼女を出て行かせなさい。あなたが彼女と交わった後で彼女を売ってはならないし、彼女の対価を受け取ってはならない[317]。

---

[305]『旧約聖書』「申命記」19章4–6節に対応。

[306]『旧約聖書』「申命記」19章10節に対応。ただし そこでは禁止の表現とはなっていない。

[307] 両写本ではawとなっているが（M: 9b; C: 12b）、刊本ではwaと直されている。ここでは両写本に従った。

[308] マンチェスター写本ではjidd^{an}となっているが、ケンブリッジ写本ではaḥad^{an}となっており（M: 9b; C: 12b）、刊本では後者に従いaḥad^{an}と翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[309] マンチェスター写本ではmā arāda mā arādaと、ケンブリッジ写本ではmā arādaとなっているが（M: 9a; C: 12b）、刊本では後者に従いmā arādaと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[310]『旧約聖書』「申命記」19章18–21節に対応。

[311]『旧約聖書』「申命記」20章10–13節に対応。

[312]『旧約聖書』「申命記」20章19節に対応。

[313] この段落は神の発言と解釈するべきなのか、神の言葉としてモーセが発言していると解釈するべきなのか、判然としない。ここではモーセの発言として訳出した。なお、どこまでが関連する発言となるかについては、このモーセによる一連の言葉の中では使われていない二人称単数が用いられている部分と考えた。

[314] マンチェスター写本では本文中にfa-aradtaとあり、欄外でwa-aḥbabtaが補われている一方、ケンブリッジ写本では本文中にwa-aḥbabtaとあり、欄外でfa-aradta（ただし形が崩れている）が補われている（M: 9b; C: 13a）。刊本ではwa-aḥbabtaとなっている。ここでは両写本に従いwa-aḥbabta fa-aradtaと解釈した。

[315] 古代イスラエルでは、喪に服するに際して額部分の頭髪を剃る習慣があり、この場面では捕虜となった女性がそれを経なければならないことを示す規定と考えられる（『旧約聖書Ⅰ律法』「申命記」p. 711, n. 6）。

[316]『旧約聖書』「申命記」21章13節では、この期間は1ヶ月となっている。これは古代ユダヤ教における喪の期間であり、当該女性がイスラエルの女性となるための期間と考えられている。これがヤアクービーのテクストにおいて3ヶ月とされているのは、『クルアーン』2章228節、65章4節、6節等に見られるの離婚規定の中で待婚期間が3ヶ月と定められていることに由来すると考えられる。

[317]『旧約聖書』「申命記」21章10–14節に対応。

父親に対して反抗したり、服従しなかったり[318]、命令を受け入れない息子については、父親はその者をその民の[319]長老たちのもとへ行かせなさい。そして人々がその者を石打ちにすることで、あなたたちの内にある悪や分断[320]が無くなり、イスラエルの民の中の彼と同様の者たちはあなたに気をつける[321]ことになる[322]。

あなたたちの誰かが、雌羊であれ雄牛であれロバであれ、持ち主のもとから迷い出た家畜を見つけた時は、それを持ち主のもとへ返さなければならない。持ち主が見つからない場合は、持ち主があらわれるまでその家畜を自身の家に留めておかなければならない[323]。

木綿と羊毛を混ぜて織った服を着てはならない[324]。また、あなたたちの服の縁を房で飾りなさい[325]。

男が妻を追い出して彼女の不貞を非難したものの、それが本当ではなかった場合は、彼に100ディルハム dirham[326]を支払わせ、彼女は終生彼の妻であり続けなければならない。また、彼が妻を追い出したことが真実によるものであった場合は、彼女は石打ちにされなければならない[327]。

男が夫のいる女性との姦通を目撃された場合は、2人とも処刑されなければならない[328]。

男が女性の意思に反して彼女のことを無理矢理に犯した場合は、彼は処刑されなければならない[329]。

男が父親の庇護下にある娘と交わり、彼女の処女を奪い、かつ彼女を愛する場合は、彼は彼女の父親に50ミスカール[330]の銀を渡して彼女を終生の妻とし、彼女を追い出してはならない[331]。

---

[318] 両写本ではyaṭi‘となっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではYẒ‘と直されている。ここでは両写本に従った。

[319] マンチェスター写本ではsha‘bᵢ-hiとなっているが、ケンブリッジ写本ではsab‘aとなっており（M: 9b; C: 13a）、刊本では後者に従いsab‘aと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

[320] 両写本ではqaṭī‘aとなっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではfaẕī‘aと直されている。ここでは両写本に従った。

[321] マンチェスター写本ではyaḥdharu-kaとなっているが、ケンブリッジ写本ではkaが書かれた後に削除されyaḥdharuとなっており（M: 9b; C: 13a）、刊本では後者に従いyaḥdharuと翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。

[322] 『旧約聖書』「申命記」21章18–21節に対応。

[323] 『旧約聖書』「申命記」22章1–3節に対応。

[324] 『旧約聖書』「申命記」22章11節に対応。

[325] 『旧約聖書』「申命記」22章12節に対応。

[326] ディルハムは、ギリシアのドラクマ銀貨を来源とする言葉であり、イスラームの銀貨およびその法廷重量（3.125g）を表す（佐藤次高「度量衡」『新イスラム事典』）。この箇所は、『旧約聖書』「申命記」では「100シェケル」とされる。ここまで、また直後の箇所でシェケルはミスカールと対応しており、この箇所でディルハムとされている理由は不明である。

[327] 『旧約聖書』「申命記」22章13–21節に対応。

[328] 『旧約聖書』「申命記」22章22節に対応。

[329] 『旧約聖書』「申命記」22章 25節に対応。

[330] 『旧約聖書』では「銀50シェケル」。これは古代イスラエルの民に課せられた通常の婚礼資金の額と同じものであると解される（『旧約聖書Ⅰ律法』「申命記」pp. 717–718, n. 18）。ただし、ヤアクービーは『旧約聖書』に基づく歴史記述の後にユダヤ教の法や習慣についてごく簡単にまとめているが、そこでは「処女に対する婚資金の最低額は200ディルハム、そうでないものについては100ディルハム」としている（L: I, 73）。

[331] 『旧約聖書』「申命記」22章28–29節に対応。

男が自身の父親が触れた女性に触れること[332]は許されず、そしてその女性の隠すべき所を見てはならない[333]。

男が不浄な状態の時は神に礼拝する場所のいずれにもmasjid min masājid Allāh入ってはならない[334]。

銀で[335]あれ金であれ、高利ribāをむさぼってはならない[336]。

あなたたちが誓いを立てた時は、その遂行を遅らせてはならない。あなたたちが契約をした時は、その契約を果たしなさい。契約を破棄してはならない。まことに神は契約を果たす者を愛する[337]。

あなたたちは白癩の者を避けて遠ざけなさい[338]。

雇い人への報酬を[339]滞らせてはならない[340]。

あなたたちは息子の罪でその父親を罰してはならず、また[46]父親の罪でその息子を罰してもならない[341]。

あなたたちの財産や収穫からの喜捨zakāt[342]を神への[343]捧げものとして祭司に払い、貧者や寡婦、孤児、困窮者、旅人たちbanī al-sabīlに与えなさい[344]。

あなたたちが良き地に入った時は、聖なるもののために平らな石でできた祭壇を作りなさい[345]。

---

[332] マンチェスター写本にはanはないが、ケンブリッジ写本では補われており（M: 9b; C: 13a）、刊本では後者に従いanと翻刻されている。ここでは刊本に従った。

[333]『旧約聖書』「申命記」23章1節に対応。

[334]『旧約聖書』「申命記」23章2–4節には、ヤハウェの集会に加わってはならない者についての言及があるが、それと対応しているか。

[335] 両写本ではli-fiḍḍaとなっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではal-fiḍḍaと直されている。ここでは両写本に従った。

[336]『旧約聖書』「申命記」23章20節に対応。

[337]『旧約聖書』「申命記」23章22–24節に対応。

[338]『旧約聖書』「申命記」24章8節に対応。

[339] 両写本ではal-ajīr ajr^{an}となっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではajr al-ajīrと直されている。ここでは両写本に従った。

[340]『旧約聖書』「申命記」24章14–15節に対応。

[341]『旧約聖書』「申命記」24章16節に対応。

[342] ザカートzakātは一般に、1年を通じて所有された財産に対して一定率の支払いが課せられる、イスラームにおいてムスリムに対して定められた義務的な喜捨を指す（森伸生「ザカート」『岩波イスラーム辞典』）。『旧約聖書』「申命記」の該当箇所には「喜捨」にあたる語はなく、イスラーム的な規定を援用したものと考えられる。

[343] マンチェスター写本ではbi-llāhとなっているが、ケンブリッジ写本にはこの語がなく（M: 9b; C: 13a）、刊本では後者に従いこの語がない。ここではマンチェスター写本に従った。

[344]『旧約聖書』「申命記」24章19–21節に対応。ただし同箇所には「旅人たちbanī al-sabīl」に当たる言葉はない。これは『クルアーン』に現れる「旅人ibn al-sabīl」が、その他の貧者、寡婦、孤児、困窮者などの語と並んで用いられるのを反映していると考えられる。この条の前半で、「喜捨zakāt」という言葉が用いられていることから、『クルアーン』9章60節における「まことに（法定）喜捨ṣadaqātは、貧者たち、困窮者たち、それを行う者たち、心が傾いたものたいのため、また奴隷たちと負債者たち、そして神の道において、また旅路にある者のみに」に基づくイスラーム的な規定を反映したものだろう。

[345]『旧約聖書』「申命記」27章1–8節に対応。

そしてイスラエルの民の祭司たちに言わせなさい[346]。『盲目の者を道から外れさせる者は呪われる[347]。困窮者たちや孤児、寡婦の裁定について公正でない者は呪われる[348]。父の妻と交わる者は呪われる[349]。獣と交わる者は呪われる[350]。自身の母や姉妹と交わる者は呪われる[351]。自身の妻の母と交わる者は呪われる。自身の兄弟の肉を密かに食べる[352]者は呪われる[353]。罪なき者nafs zakīya[354]の処刑について不正に賄賂を取る者は呪われる[355]。神の指示したことを行わない者はみな呪われる[356]』」。

その後、モーセは彼らに向かって言った。「私はあなたたちに神の指示をもたらし、神の命令を知らせてきた。あなたたちはそれに従って行動しなさい。私はすでに120歳になってしまった[357]。私に死が近づいてきた。この者がヌンの子ヨシュアであり、私の後にあなたたちを率いる者である[358]。あなたたちは彼（の言葉）を聞き、彼の命令に従いなさい。彼はあなたたちに真実に基づいて裁定を下すだろう。彼に背く者、彼に反抗する者は呪われる」と。アロンの死とモーセの死が訪れるまでの間は7ヶ月であった。その後、モーセはネボ山Jabal Nābūn[359]に登り、シリアを見渡した。すると神が彼に言った。「これがアブラハム、イサク、ヤコブに対して彼らの子孫へ与えると私が約束した地である。私はお前の目にその地を見せた。しかしお前がその地に入ることはない」と。そしてモーセはその場所で死んだ。ヌンの子ヨシュアが彼を埋葬した。彼の墓の場所を誰も知らなかった[360]。

---

[346] 両写本ではwal-yaqulとなっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではfal-yaqulと直されている。ここでは両写本に従った。
[347] 『旧約聖書』「申命記」27章18節に対応。
[348] 『旧約聖書』「申命記」27章19節に対応。
[349] 『旧約聖書』「申命記」27章20節に対応。
[350] 『旧約聖書』「申命記」27章21節に対応。
[351] 『旧約聖書』「申命記」27章22節に対応。
[352] 両写本ではya’khudhuとなっているが（M: 9b; C: 13a）、刊本ではya’kuluと直されている。ここでは両写本に従った。
[353] 『旧約聖書』「申命記」27章24節に対応。
[354] この語句については『クルアーン』18章74節にもモーセがヒドルal-Khiḍrに言った言葉として「あなたは無辜の者をnafs[an] zakīyat[an]（殺人に対する）命の代償でもなく殺したのですか。まことにいまわしいことをしたものです」という用例があり、それを踏まえている可能性もある。
[355] 『旧約聖書』「申命記」27章25節に対応。
[356] 『旧約聖書』「申命記」27章26節に対応。
[357] 『旧約聖書』「申命記」31章2節に対応。
[358] 『旧約聖書』「申命記」31章3節に対応。
[359] 両写本では مابون となっているが（M: 9b; C: 13b）、刊本ではNābūnと直されている。ここでは刊本に従った。ネボ山は、『旧約聖書』「申命記」32章49節、24章1節で言及されるもので、『旧約聖書』中のより新しい伝承で用いられ、より古い伝承ではピスガという名で呼ばれている。ワーディー・アユーン・ムーサー地域にある、現在ではṢiyāghaと呼ばれている丘であろうと推定されている（K. Elliger+木幡藤子「ネボ」『旧約新約聖書大事典』; K. Elliger＋山我哲雄「ピスガ」『旧約新約聖書大事典』）。
[360] 『旧約聖書』「申命記」34章1–6節に対応。